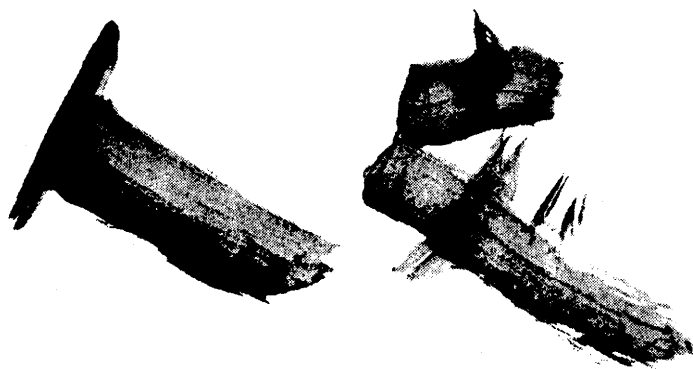




第四二号



1996

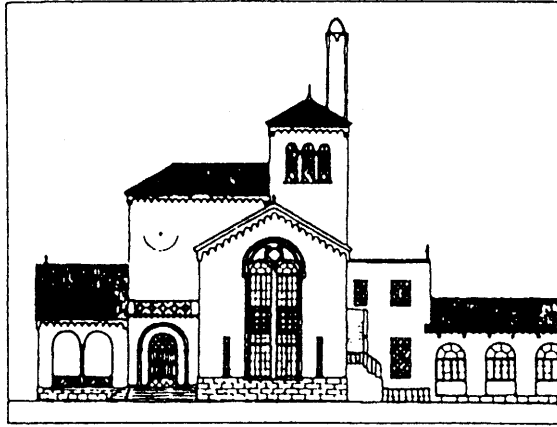
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第四二号

1995年 1 月—1995年 12月

も く じ



随想

京から読む「絵空事」

ロナルド・トビ

「回顧」の次元と「期待」の次元

狭間 直樹

大洪水のあと

宇佐美 齊

講演

夏期講座

自伝のトボス（齊藤）／インドの宗教ナショナルリズムが語る過去（田中雅）／バビン共和国盛衰記（小山）／「犬と中国人は入るべからず」（石川）／「統治の書」と一〇／一二世紀の東方イスラーム世界（稲葉）／王昭君の物語（金）

開所記念講演

經典の偽作と戒律—梵網經をめぐる（船山）／読む機械—啓蒙と活字メディア（富永）／「満洲国」の終焉（山本）

退官記念講演

明末清初のレジスタンス（小野）

集報

おくりもの（24） 計報（24） 人のうごき（24）

外国人研究員（28） 招聘外国人学者（29） 外国人研究生（29）

東洋学文献センター講習会（30） お客さま（32）

共同研究の話題

転換期における個人と組織 佐々木 克

『成實論』をめぐる二つの偶合について 荒牧 典俊

コミュニケーションの社会史—情報と「交通」 前川 和也

所のうち・そと

東西にわたるコンファレンス 籠谷 直人

日中共同発掘のはじまり 岡村 秀典

「コジンスキイの健康を祝す！」 小山 哲

書いたもの一覽

京から読む「絵空事」

ロナルド・トビ

今まで三十年間ものわが日本学人生は、日米間の渡り鳥として幾度も来日し、長期滞在だけでも、累積すると十年間に近い。研究テーマは、いろいろと進展はあると思うが、終始、日本特に近世の日本と近隣の他者（異国・異国人）との関り合いの歴史が軸軸をなしている。特に関心を持ち続けてきたのは、日本人がイメージする「朝鮮」や「琉球」である。——朝鮮人がイメージする「日本」も、むろん関心あるが。——

しかし、足掛け三十年間、通算十年間の滞在場所は、これまでは一貫して東京だった。いうまでもなく、江戸幕府が作った空間だ。江戸期を通じて、「幕府」と「朝鮮国」が外交関係を保ち、時には朝鮮からの使節（朝鮮通信使）が来日し、「お膝元」江戸へ往來するたびに、必ず京都に寄り、京都に数日間逗留した。

ところが、元和三（一六一七）年の一回だけ、二代將軍秀忠がその「お膝」を京の都へ運んだので、朝鮮通信使は、「東下り」をせず、終始京都大徳寺に留まり、八月二六日の謁見に、伏見



城まで往復した。

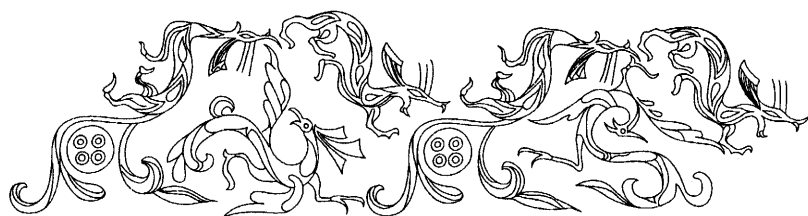
後の通信使に関しては、「絵空事」とはいえ、その様子を伝える絵画史料が数多く知られているが、初回、二回目の絵画史料は知られていなかった。しかし、この度、アメリカのバーク・コレクシヨンに、朝鮮通信使と思しき図像が入った「洛中洛外図屏風」があると聞いて、立ち寄ってみた。

みれば、案の定、「通信使」行列のようなものが、「だいいり」の方へ進もうとしているが、形もおかしく、旗印も狂っている。旗に「十」字が描かれている。朝鮮通信使は、いろいろと派手な旗を掲げていたが、十字印の物はない。キリシタンと朝鮮と混合しているか、と思った。

そして豊臣家ゆかりの方広寺界限にも、異人らしき図像が多い。二人の主人公と思われる人物は、紛れもない「南蛮」風のズボンやマント姿だが、従者たちは、ズボンを履いており、頭は朝鮮髷（サントウ）を頂く。全く妙な「混血」である。

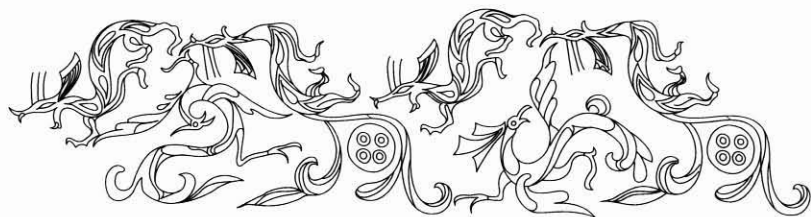
建造物をみると、一六一九年建立の櫓が、内裏の奥に見られる。これは、和子（東福門院）の入内を描く林原美術館本「洛中洛外図屏風」の、同様の描き方の内裏を踏襲していると思われる。十字架は、長崎の大殉教（一六二二年）以降、きわめて描きにくいシンボル（危険思想）であるため、屏風の作製時期は、櫓の建立後の約三年間に収まるようだ。

一六一七年の朝鮮通信使は、八月二六日の謁見が終わると、帰路、伏見街道沿いの方広寺境内で昼食。そして、五條の大橋



(伏見口)を渡り、しもから洛中を通って、宿舎の大徳寺へ戻る(『東槎録』)。内裏の横を通るのも、ごく自然である。人物は、「誤写」混ぜの絵空事とはいえ、私の目の前に、一番古いと思われる「朝鮮通信使」の図像が浮かび上がっていた。

いくら東京で留学しても、京都はもう一つの観光地にすぎなかったため、実感がなかなか掴めなかった。京都に住む機会があつてこそ、この屏風に接して、その空間的意味やそこに潜んでいる「絵空事」の裏が読み取れたのである。



「回顧」の次元と「期待」の次元

狭間 直樹

いつの間にか、二一世紀が目前である。「世紀末」の語が皮膚に張り付くような閉塞感を掻き立てるのにたいし、「新世紀」を口にすれば、観念だけのことと分かつてはいても、未来への展望が開けるような気がしてくるものだ。

前世紀の末、一八九九年の大晦日、梁啓超はアメリカを目指して太平洋の船上にいた。その夜半、「二十世紀太平洋の歌」と題する長歌をつくっている。戊戌政変後に亡命した日本で「耳目神氣頗る発皇た^{ひらけ}」のだが、さらに一步を進めよというのである。

少年、弧を懸けて四方にむかうの志あれば、

未だ敢えて久しく蓬萊^{にほんこいた}に恋わず。

誓いて将に彼の世界共和政体の祖国に適き、

政を問ひ学を求めて其の光を覲んとす。

新しい世紀を迎える感慨と新世界への旅立ちの興奮がよく出ている。この高ぶりは、進化論に依拠してエジプト以来の歴史



を述べ、帝国主義全盛の時代における中国の地位を論じるなど新思想に富み広大豪放の気迫に満ちた歴史認識の提示と密接に関連づけられて表明されているのである。

しかし見落としてならないのは、在日一年有余の間に、来日のときに抱いていた日本にたいする期待感が消え失せていることである。

一八九八年秋、亡命のさいの船中の作、「国を去るの行^え」にいう。新政を推進した光緒皇帝は幽囚されて命旦夕の危きにあり、譚嗣同ら同志が処刑されるという苦渋のなか、梁啓超が生き延びて亡命した自分に課した任務は「東方の君子国」日本に救援を頼むことであつた。そのため、かれは春秋時代の楚の大夫申包胥の故事にならつて「秦庭七日の哭」を為し、光緒帝救援の活動に奔走したのである。梁の目に映つた維新後の日本はこうである。

爾来、明治の新政大地を耀かせ、

欧米を凌駕して気葱龍^{きそうりゆう}なり。

梁啓超にすれば、日本の維新と中国の変法は同一の思想的基盤にたつものだった。だから日本が自分たちを援助するのは当然と考えていたのだが、あろうことか、現実には日本政府に厄介もの扱いされて離日するしかなかった。梁が思想的に構想したアイデンティティーは日本政府に退けられたのである。「二十世紀太平洋の歌」で、日本に未練なく共和政体の祖国に望みをかけた所以である。



この思想と政治のレヴェルギャップを自覚させたことこそ、梁啓超がいう日本での「思想一新」のもっとも根底的なものだったのではないか。中国近代史一般がそうだが、梁啓超にたいする評価はとりわけ、レッドフィールドのいう「回顧」の次元から整理されて、後世の政治的な枠組からするそれを押しつけられてきた。「期待」の次元、すなわち梁が生きた当時の時空にことがらを置きなおして見ることを、自らの反省をこめて心掛けたい。



大洪水のあと

宇佐美 齊

戦後五十年という節目にあたる昨年（一九九五年）は、さまざまな異変に見舞われた年だった。自然災害である阪神大震災と、特定集団であるオウム真理教がひきおこした一連の犯罪とでは、もちろん事件としての性格をまったく異にする。けれども両者がともに、すでに数年まえから漂い始めていたなにやら世紀末風の崩落の気配を、いよいよ濃厚なものにするのに大いに与ったことだけは、否定できない事実だろう。おそらく後世は私たちの時代のブネウマすなわち「精神」空気」を読み解く鍵を、このふたつの大きな事件に求めるに違いない。

ところで、ひとびとが敗戦後の困難な日々耐え数十年にわたって営々として築き上げてきたものを、一瞬のうちに白紙還元してしまう天変地異の本当の恐ろしさは、実際に体験したひとでなければわからないだろう。けれども、かつて十数年にわたって阪神間に住んだことのある私にとっても、あの明るくてどこことなく華やいだところのある空間がまたたくうちに瓦礫の山と化してしまったのは、知人の死や友人の罹災の報に接して現地を数度にわたって訪れるということがあっただけに、やは

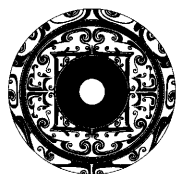


りひとごととは思えない悲痛な出来事であった。そしてそのときに生々しく思い出されたのは、かつて郷里で身をもって体験した伊勢湾台風のことだった。五千名をこえる犠牲者を出し多くのひとびとの住居を奪ってふたたび困窮の生活へと追いやったあの災害に、当時高校二年生であった私は強い衝撃を受け、小牧空港で救援物資の積み卸しや、特に被害の大きかった干拓地の小学校での土砂の排出などの作業を、ささやかながらボランティアの一員として手伝った経験があるのである。

ちようどそのころ手にした一冊の薄っぺらな文庫本のなかに、「大洪水のあと」と題する黙示録風の散文詩があった。原詩はさまざまな読解の試みにも耐え得るいかにも謎めいたところのある魅惑的なテキストであるが、例えばパリ・コミューンというフランスの内乱とその後の社会や文化のアレゴリーとしても充分に読める作品である。少し大げさな物言いをすれば、当時はまさかこれが私の一生を左右することになるだろうなどとは思ってもよらなかった。爾来三十六年間、アルチュール・ランボーという名の詩人は、私にとっては特別な意味を持つ存在となった。こうして私は昨年一年間の大半を、この詩人の全作品の新訳と注解の作業に没頭して過ごすことになったのであるが、たまたまそれが阪神大震災とオウム事件とに明け暮れた異数の年であったことに、不思議な暗合を見ないわけにはいかないのである。



講演



夏期講座 (一九九五年度)

七月七日―八日
於 本館会議室

自伝のトpos

――六朝士大夫の私語りから――

齋藤 希史

過去というものは、語られることによって始めて過去としての形を与えられて、われわれの目の前に立ち現れる。語られる以前の過去、というのは、かたちをもたない不定の存在、もしくは、存在としてさえも明確に認知されていないもの、だろう。ひとたび語られるや、まるで最初からそうであったかのように、それ

はあるかたちを身にまといはじめるのだが、私の過去を語る自伝というテキストの場合、語られることによってかたちを与えられるのは、自己である。自分が何者であるかを、他人に対して、またしばしばみずからのために、それは語る。そしてその自己のかたちは、個別的であるよりはむしろ共通することが多い。

中国における私語りの発端を、唐の劉知幾は《離騷》や《史記》太史公自序などを挙げて説明するが、それらは基本的には政治的不遇という契機によって自己を語るに至ったものであった。孤高なるがゆえの強烈な私語りであり、社会との緊張がつねに内包されていた。ところが後漢になると、張衡《歸田賦》のように、逆に、社会から離れているがゆえに自足した私の生活をうたうものが現れてくる。それを隱逸思想の流行の一端と見ることもできようが、むしろ自己を隱遁者として認識しそこに喜びを見出すこのようなテキストが編み出されたからこそ、隱逸思想が流行するに至ったと考えたい。ここにおいて、社会との緊張を必要としない自己認識のパターンが確立されたのである。そしてこの自己認識は、どうやら住まう「場」と緊密に結びついている。その「場」は楽園表象の私化でもあるのだが、それが私化されるにあたっては、時間のない無辺の天国であるよりは、季節と場所の特定された具体

的なトポスが一定の修辭で表現される。潘岳《閑居賦》や陶淵明の諸作品など、隱逸者としての自己をうたった六朝期のさまざまなテクストは、まさにこのトポスを得て始めて成立したものであると同時に、このトポスを強固にすることに成功したものである。

そしてこのトポスによって、私語りによって眼前される自己のかたちに隱逸という行為がしっかりと組みこまれ、今に至るまで、われわれの自己認識に大きく作用しているのである。このことは、東アジア世界における自伝のありようと西洋におけるその伝統とを併せ考えてみると、よりはっきりと浮かびあがるであろう。

インドの宗教ナショナリズムが語る過去

田 中 雅 一

冷戦構造の崩壊にともなう世界各地でいわゆる民族問題が噴出してきている。その多くが宗教を異にする集団間の対立として理解されている。さまざまな対立の背後には政治・経済的な問題が存在しているため、単純に宗教を民族紛争の決定要因であると断言するわけにはいかないが、宗教が対立を拡大していることは確かである。ここで論じるインドにおけるヒンドゥーとムスリムとの対立の場合もやはり宗教が重要な要因となっている。

一九八〇年代からインドではヒンドゥー教を国家の根幹に据える「ヒンドゥー・ナショナリズム」の台頭が顕著となる。そのイデオロギーは一九二〇年代の反英・反植民地主義運動にまで遡ることができる。そこで自問されたのは将来のインドを支える人々の条件である。それはなによりもインド世界を聖なる土地とみなす人々（そこにはヒンドゥー教徒だけでなく、仏教徒やジャイナ教徒、シク教徒なども含まれる）であり、

結果としてムスリムやキリスト教徒たちは国家建設のビジョンからはずされた。

こうした反ムスリム、反キリスト教を核とするヒンドゥー・ナシヨナリズムは、インド独立以後長期政権を樹立した国民会議派の政教分離主義・世俗国家論が少数派のムスリムらに有利に働いていると抗議する。また宗教の領域においては北インド・アヨーディヤにあるモスクが本来ヒンドゥー寺院を破壊して建てられたと主張し、これを破壊してもう一度ヒンドゥー寺院を再建せよという運動を組織する。

ヒンドゥー・ナシヨナリズムが語る過去とは、アヨーディヤは『ラーマヤナ』の英雄で、ヴィシュヌ神の化身とされるラーマの誕生地であり、それを記念してラーマの寺院が建てられていたということである。まず、ラーマが歴史上の存在かどうかということが問われた。しかし、より現実的な問題は、はたして一七世紀にこの地にラーマの寺院が存在し、それをムスリムたちが破壊して同じ場所にモスクを建てたのかどうかということであった。この問いをめぐる政治家だけでなく、歴史家や考古学者たちが激しい論争を繰り広げた。当のモスクは一九九二年一月に暴徒たちによって破壊された。しかし、過去をめぐる問題はなお解決を見ていない。

バビン共和国盛衰記

——近世ポーランドのパロディ国家——

小山 哲

「バビン共和国」は、近世のポーランド貴族がつくったパロディ国家である。バビンという村の領主の家に貴族たちが集い、酒を飲みながら冗談話を披露し、喝采を博したり嘲笑を浴びたりした者が官職を授けられた。この国は一六世紀後半から一六七七年まで続き、一七世紀以降については官職授与の目録が冗談話つきで残されている。

架空の国を舞台にした物語といえば、ちよつと思いつくだけでもプラトンのアトランティスの物語にはじまって、トマス・モア『ユートピア』、スウィフト『ガリバー旅行記』からオーウェル『一九八四年』、井上ひさし『吉里吉里人』にいたるまで、枚挙にいとまがない。しかし、これらの架空の国がいずれもテキストのなかにのみ存在するのに対して、バビン共和国の場合は百年余りにわたって人びとがパフォーマンスとして演じ続け、その記録を残し、さらにそのテキストを読

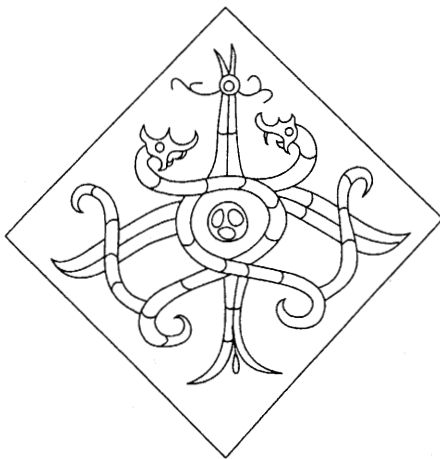
んだ後世の人びとが今日にいたるまでさまざまな物語を語り続けてきた、という点が独特である。いったい、この「パロディで国家を創る」という物語を実際に演じたのはどんな人たちだったのか。また、この物語は後世の人たちのあいだでどのように語り継がれてきたのだろうか。

「バビン人」たちが書き残した記録から浮かび上がってくるのは、宴会で社交を深めながら情報を交換し、官職遊びで肩書き願望を満たそうとするシュラフタ（貴族身分）の世界である。バビンの領主ブシヨンカ家は当初はプロテスタントで、この時期のバビンには多様な宗派のシュラフタが集まっていたが、やがて当主がカトリックに改宗すると宗教的に閉鎖化し、活気を失っていく。そういう意味では、バビン共和国の盛衰は、反宗教改革期のシュラフタ社会の雰囲気の変化をよく映し出しているのである。

一八世紀末に分割によってポーランドが国家の独立を失ったあと、バビン共和国は一時、祖国の輝かしい過去と自由の伝統を象徴する存在として、絵画や文学の題材となった。今世紀前半にはこうした偶像化への批判も強まったが、今日では社会史・文化史研究の対象として再び注目を集めている。

最後にバビン村の近況をスライドで紹介した。三十

年程前にも共和国復興の気運が盛り上がり、五年間ばかり続いたという。バビンの物語は、いまなお語られ続け、将来また演じられる可能性を残しているというべきかもしれない。



「犬と中国人は入るべからず」

——上海租界伝説——

石川 禎 浩

一九九四年の中国で、「犬と中国人は入るべからず（華人與狗不得入内）」の立て札が本当に存在したのかをめぐって、時ならぬ論争が行われた。「犬と中国人は……」といえ、オールド上海の租界公園（外灘公園）にあった立て札の文字として、あまりにも有名な文句である。どうやら中国での論争は、その字句は確かに存在したという方向で、半ば強引に決着したようであるが、果たしてどうなのだろうか。問題は、大きく二つに分けられよう。つまり第一に、公園の立て札にはその字句があったか、あったとすればそれはいつまで存在していたのか、そして第二に、中国人はその間、本当にその公園に入れなかったのか、である。

第一の問題についていえば、一九一三年以来の公園規則を見る限り、確かにそこには中国人の入園を制限する規定と犬を連れての入園を禁止する規定があった。ただし、それはそれぞれ別個の条項に規定されて

いるものであって、犬と中国人を並記した規定、つまり「犬と中国人は入るべからず」という条項は見当たらない。つまり、公園正面入口の立て札を見る限り、そこには「犬と中国人は……」という字句はなかったということになるのである。また、中国人の入園を認めない規定は、外灘公園については一九二八年六月をもって廃止され、それ以降は入園料さえ払えば、中国人も堂々と入ることができたのだった。第二の問題についてはどうか。実は、中国人の入園を認めない規定のあった一九二八年以前にあつても、中国人は服装を整えれば（洋服を着れば）、入園可能だったのである。では中国服がダメだったのかといえ、そうでもなかった。現に中国服を着て公園に遊んだ日本人もいたからである。

公園の入口に「犬と中国人は……」の立て札があったという伝説と、そこに中国人の入園を制限する規定があった（実際は中国人も入園可能）という史実の違いは、小さいように見えて実は大きい。とすれば、立て札問題が意味するものは、その事実の如何というよりも、むしろ公園入園をめぐる複雑な事情が「犬と中国人は……」という一種の強烈な伝説に集約されていたという読みかえの方にあると言えるだろう。そして、列強支配からの解放という切望の中で行われた

その読みかえこそが、中国革命の動力のありかを示していると言えるのではなからうか。したがって、中国が「犬と中国人は……」の字句に凝縮される列強の支配を覆したことをもって自らの存在意義とする限り、かつての租界公園の立て札に記されていた字句は、今なお「犬と中国人は入るべからず」でなければならぬのである。

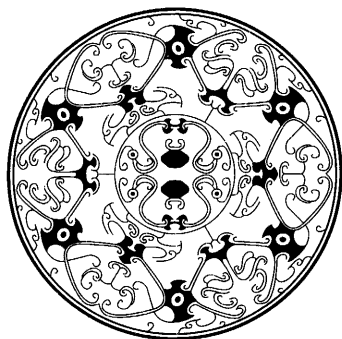
『統治の書』と一〇〇～一二世紀の 東方イスラーム世界

稲 葉 穰

イラン、アフガニスタンを中心とする東方イスラーム世界と呼ばれる地域においては、西暦一〇世紀から一二世紀にかけての二百年間に、社会の様々なフェイズにおいて幾つかの顕著な変化が生じたとされている。中でも特徴的なものとして、ペルシア・イスラーム文化の隆盛、マムルーク（軍事奴隸）や遊牧部族集団としてのテュルク系遊牧民のイスラーム世界への流入、シーア派の台頭やスーフィズムの発展等の宗教面での変化が数えられるであろう。今回の講演では、この時期に近世ペルシア語で著された「君主鑑」と呼ばれるジャンルの文学作品、なかでも有名なセルジューク朝の宰相ニザーム・アルムルクによってあらわされた『統治の書』という名の書物を取りあげ、その中にこの「一〇〇～一二世紀の変革」がどのような形で反映しているのかを読み解く試みを行う。「君主鑑」というのは言い換えれば君主のための統治術マニュアルであ

り、サーサーン朝時代からの伝統をひく「ペルシア的」なジャンルである。一方、アラブ・ムスリムの征服を受けた後、約二世紀間の沈黙を経て文章語として成立した近世ペルシア語によってイスラーム以前の伝統である「君主鑑」が著されたという事実自体が、この時期におけるペルシア・イスラーム文化の隆盛を端的に示すものであるが、それ以外にもイスラームの枠をやや外れた世俗的な（おそらくペルシア的と言ってよい）王権概念の肯定などもそのうちに見えることは指摘されるべきであろう。一方、著者のニザーム・アルムルクが仕えたセルジューク朝の君主達はイスラーム世界の外側から征服者として到来したテュルク人であり、彼らの王権を正当化するためにも、このペルシア的な王権概念は有効であったと考えられる。同時にセルジューク朝はその内部に多くのテュルク人（マムルークとしても部族集団としても）を抱え、彼らの扱いが王朝護持のための最重要課題であった。そのため『統治の書』にもその関係の記述が多い。宗教面においてはニザーム・アルムルク自身のシアー的なものの強い警戒心の故に「正統」スナナの護持が前面に打ち出されている。そのシアー派に対する攻撃の故であろうか、ニザーム・アルムルクは最後、シアー派の一派であるニザール派の暗殺者の手にかかって斃れている。

る。一言で言うなら上記の変革の二世紀における顕著な三つの特徴がニザーム・アルムルクという個人の中で統合され咀嚼されて出てきた結果が『統治の書』であると言える。その意味ではこの書は、まさしく当時の東方イスラーム世界を映し出す「鑑」であるといつてよい。



王昭君の物語

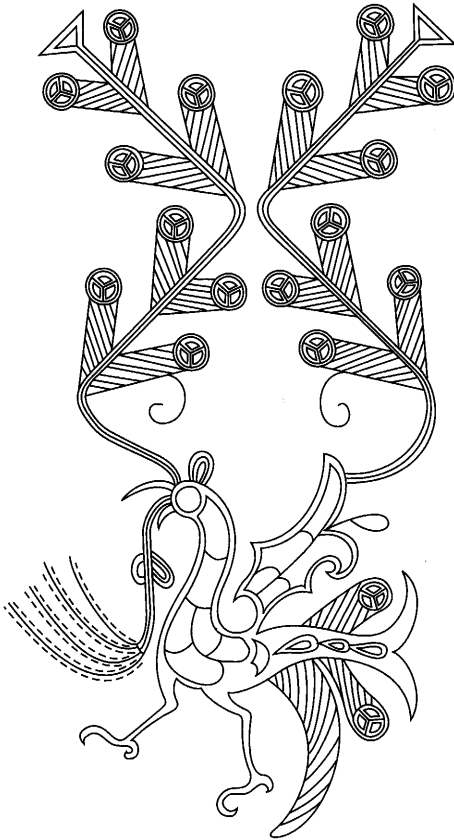
金 文 京

西暦紀元前三三年、中国の年号でいえば前漢の元帝、竟寧元年、宮女の王昭君が匈奴の王、呼韓邪单于のもとに嫁がされた。むろん漢と匈奴との和平を保つための政略結婚である。呼韓邪单于の死後、彼女は匈奴の習慣にしたがって次の单于と再婚し、その間三人の子供を生んで匈奴の地に没した。今日われわれが王昭君について知ることのできる史実は、これだけである。しかし彼女が後世有名になったのはこの史実のためではなく、その後、史実に加えられたさまざまなフィクションによつてであろう。まず六朝時代の『西京雜記』には、彼女から賄賂をもらえなかった絵師の毛延寿がことさらに彼女の姿を醜く描いたために匈奴へやられてしまったという根も葉もない話がみえる。これによつて運命に翻弄され、政略結婚の犠牲となった悲劇のヒロインというイメージが彼女に定着することになったのである。以後、その悲運を歌った「昭君怨」「明妃曲」などは、歴代の詩人たちにとって恰好の題

材となり、また「昭君出塞」は画題としても好んで取り上げられた。

これら王昭君をめぐる物語や詩歌のなかで、もつともユニークなのは今世紀初めに敦煌で発見された「王昭君変文」であろう。変文とは、おもに唐代に流行した韻文と散文による一種の語りもの文芸である。この作品では、古典詩歌やそれまでの伝説ではほとんど無視された呼韓邪单于の存在がクローズアップされ、その王昭君にたいする愛情が描かれているが、王昭君は单于の愛を顧みず、自分を見捨てた漢の元帝を恋焦がれながら死ぬのであつて、すなわちここでは愛情の三角関係が重要なテーマとなっている。この関係は、「長恨歌」で有名な唐の玄宗と楊貴妃および安祿山をめぐる唐代の俗説とほぼ同巧であり、その影響は日本の謡曲「昭君」にまでも及んでいる可能性がある。さらに「王昭君変文」には、この作品が書かれたと信じられる唐代中期の国際関係が反映している点が注目される。唐王朝は、突厥、ウイグル、チベットなどの塞外民族の侵略に苦しみ、かねてより融和策としてしばしば皇帝の娘、すなわち公主をこれらの民族の王に降嫁させた。いわゆる和蕃公主である。ところで「王昭君変文」では、呼韓邪单于は突厥やウイグルの王の称号である可汗をもつて呼ばれ、また王昭君も公主という

ことになっており、中にみえる地名なども多くは唐代のそれである。つまり当時の人々は王昭君の史実を物語を通して理解したのみならず、その物語によって彼等にとつての時事問題をも解釈しようとしたのであり、そこには史実から物語へ、そしてまた物語から史実へという歴史と物語の重層的な関係が見てとれるであらう。



開所記念講演（一九九五年度）

十一月二十六日
於 本館会議室

經典の偽作と戒律

——梵網經をめぐる——

船 山 徹

中国で偽作されたことを意図的に隠して、あたかもインドにおいて仏陀が説いたかのように装って作られた漢文仏教經典を疑經と呼ぶ。菩薩戒（修行者が菩薩として必ず守るべき戒律）を説く經典として後に中国日本で大流行した『梵網經』は、実は疑經であり、その成立は遅くとも六世紀初頭と考えられる。このことは言われて久しい。しかし、嚴密にいつ作成されたか、中国のどこで作成されたか、なぜ作成する必要があるのか等々の素朴にして根本的な問いに対する答えは、まだ見つかっていない。これらの「謎」を解き明かす手がかりはないものだろうか。

『梵網經』には、菩薩戒を十重四十八輕戒（根本十

項目と細則四十八項目）という体系にまとめようとする意識が見てとれる。經のその部分は、修行者たちが十五日ごとに行う儀礼集会（布薩）において、具体的に確認し合い、自己反省をする際に、皆が一緒にリハースすべきものとして実際に使えるように書かれている。とくに根本十項目は、他の菩薩戒關係經典と比べた場合、他經の説く項目（經によって内容と項目数がみな異なる）を整理して重複しないように数え上げると、ちょうど梵網の説く十項目と一致することがわかる。さらに、十項目のうち「酒を飲んだり売買したりするな」という項目は、もっぱら出家者ではなく在家者の場合にこそ意味をもつ。おそらく梵網の作者は、実践的見地から、他の經典に不十分さ、あるいは不便を感じていたのだろう。そこで、出家者と在家者が同じひとつの場でリハースする時に、過不足のない戒律条項をのべた便利なテキスト、しかも權威のあるテキストが欲しかったのではないだろうか。偽作の目的は他にもあったにちがいない。たとえば時の政治のありかたに対する批判精神がある。具体的には、批判は国家による仏教弾圧ならびに教団規制に対して向けられている。それを実際に行った北魏時代の動向にかんがみて、この經典は北朝において、四五五年頃から三十年ほどの間に作成されたと推測しておくのが今のところ

ろ最も穩当であろう。また、菩薩の修行階梯を説く上巻部分には「住前三十心」という、インド仏教にはない考え方がみられる。類似のものは、『大般涅槃經集解』の僧亮説（四六〇年頃）、僧宗説（四九〇年頃）、宝亮説（五〇〇年頃）——三人とも南朝の人物——に確認される。このことから、『梵網經』の出現当時および直後における「住前三十心」の全中国的といってよい流行のあとが窺われる。

読む機械

——啓蒙と活字メディア

富 永 茂 樹

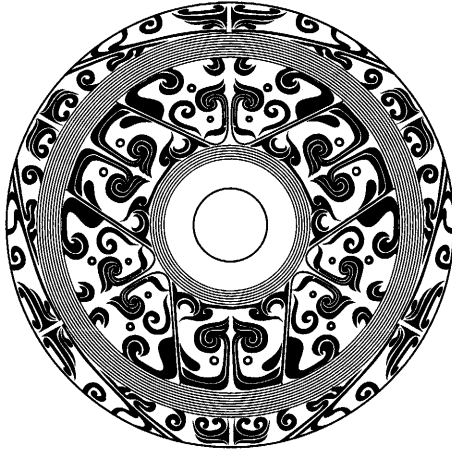
《自由の実現を妨げるようなかたちでの自由についての思考》（M・ゴーシェ）がフランス革命に、したがって近代の政治文化にはつきまといっている。そのことはたとえば、革命がシエースのいう《なにか》つまり市民に人間が変わることを至上命令として掲げながら、その市民になるための社会空間を次々と禁止ないし制限していった点にもっともよく現れている。より具体的には一七九一年における政治結社（民衆協会）にたいする立憲派の攻撃をわれわれは念頭においているのだが、このとき法令を提案するル・シャブリエが人間の社会化のための手段として、中間集団にかえて書物を書きまた読むことを勧めているのは、長大な議論のうちのたった一行の発言であるとはいえきわめて興味深い。

これとちょうど同じ時期に、コンドルセは啓蒙を受け継ぐ革命の課題としての公教育の制度化に関与する

なかで、必ずしも集会を開催しなくてもよい、分散した科学者の団体（なぜなら情報は書物や手紙で充分に交換できるから）を提案し、また学校教育についても科目によっては読書をおして単独で学べるものがある（たとえば数学）ことを指摘していた。コンドルセの読書ないし活字メディアへの関心は革命以前に遡るが、彼は印刷による情報の流通の空間的・時間的拡大に加えて、とりわけ情念に訴えかける演説との対比で読書と理性の発達を結びつけた点で注目し値する。これは『啓蒙とはなにか』のカントが『理性の公的な行使』の前提に読書する公衆の存在をおいていたのと並べてもよいだろう。

コンドルセによれば、読書という行為は冷静にかつ熟慮をもってなされるものであり、そうであるからこそ人間の理性の完成をうながし、また活字メディアをおして形成される《世論》なるものはその正当性を認知されるはずであった。啓蒙とは活字による近代的な主体の形成のことであったといいかえることもできよう。だが、この読書をおして形成される主体とは、印刷が分散した世界に向けて広く伝えられるものであるかぎりにおいて、直接の対面的な関係に欠ける孤立した状態におかれ、また同一の情報の多数の複製が可能なものであり、さらに冷静という性質は冷たいと読

みかえることもできる。つまり近代人は機械のような存在なのであり、フランス語でタイプライターを《書く機械》と呼ぶのにならうていえば、われわれはまさに《読む機械》として作られてきたのだった。



「満洲国」の終焉

山 本 有 造

アメリカの西海岸、スタンフォード大学フーヴァー研究所文書室に「張公権文書」という小さなコレクションが収められている。量では小さいけれども、一九四〇年代終末期「満洲国」の貴重な経済統計、戦争直後の「東北」経済状況分析、そして国民政府による東北経済開発計画を含む誠に希有な資料群ということができる。

張嘉璈、字を公権。一八八八年江蘇省に生まれる。浙江系の銀行家、国民政府の経済テクノクラートとして活躍。国民政府の台湾移遷後は中国を離れ、主に米国において中国金融史の専門家として研究活動に従事。ロヨラ大学教授、フーヴァー研究所上席研究員などを歴任ののち、一九七九年パロアルト市にて逝去。享年九十一歳。

「張公権文書」は、「満洲国」崩壊ののち国民政府を代表して中国東北地域の接収にあたった「国民政府主席東北行營」の活動に由来するが、張がその経済関係

最高責任者、すなわち東北行營經濟委員會主任委員および（中ソ共同管理の）中長鐵路公司理事長として活動した一九四五年末から一九四七年にかけて現地で収集・作成した主要文書のうち、彼が特に将来の研究のために選択・整理・保管した主に経済・金融関係文書からなり、その後三十年にわたって彼と行をとにしたのち、フーヴァー研究所に寄贈されたものである。

本講演では、「張公権文書」の由来から説き起こし、ソ連・国府・中共三つ巴の争奪戦の下に置かれた「満洲」「中国東北地区における「東北行營」の活動経過を振り返り、最後に「東北行營関係文書」のその後の運命を物語った。

実は、「東北行營」經濟委員會の調査・立案活動には、元滿業總裁の高碕達之助以下いわゆる「留用」日本人専門家が多数参加し、「満洲国」統治の実態報告、戦後東北経済の状況分析、東北経済復興の計画立案に尽力している。戦乱のなかに取り残され、国家の保護を失ったなかで、彼らは自らの手で「満洲国」の「墓碑銘」を書き残そうとしたのである。『満洲国』の終焉」と題した由縁である。

退官記念講演

明末清初のレジスタンス

小野 和子

中国のルソーとよばれた黄宗羲の『明夷待訪録』が、私の研究の出発点であった。明末、魏忠賢の恐怖政治のなかで、彼は、東林党人の父・黄尊素を失ったが、彼自身もやがて「小東林」とよばれた復社に名を連ねて、閹党（閹は宦官）に反対する学生運動に加わり、さらには明滅亡の後、非常な危険を冒しつつ、レジスタンスに加わって活動することになる。

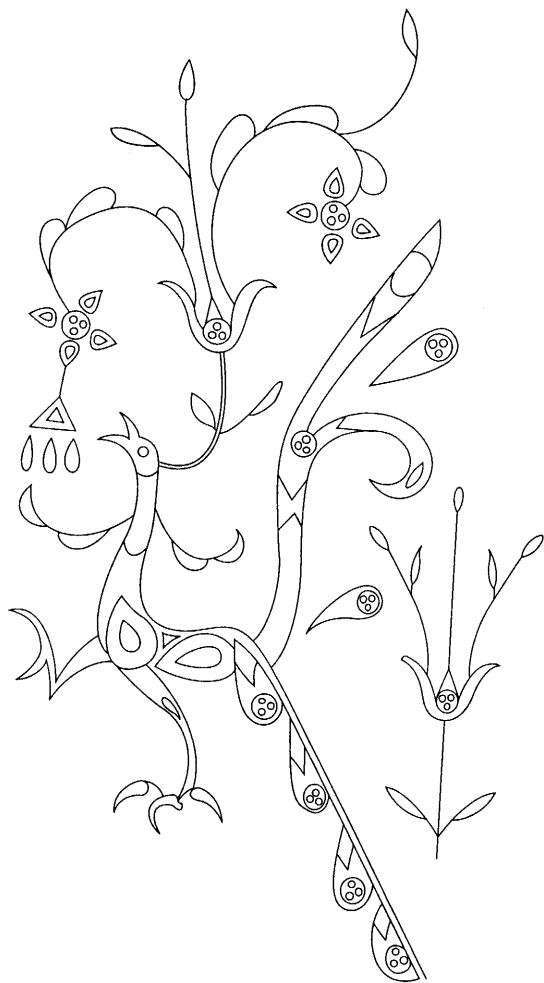
寧波に近い彼の郷里では、清朝に入ってから数年にわたって、四明山を根拠地にレジスタンスがたたかれた。満州の風俗である辮髪を強要されることは、異民族の王朝の奴隷となった屈従を、自らの姿形にあらわすことである。それはいたく個人の尊厳と民族の誇りを傷つけるものとなって、各地にレジスタンスの軍が蜂起したのである。そこではむろん「髪を全うす

る」がスローガンになったが、そればかりではなかった。髪をもふくめた中華の文明を保持することが、彼らの目標になったのであって、彼らのなかには、単なる種族意識にとどまらぬ、文明を共有するものとしての民族の誇りが芽生えつつあった、と思われる。

当時、そのシンボルとなったのは、明王朝の血を継ぐ魯王監国であったが、戦乱のなかで、王権が、直接、レジスタンスの根拠地であった四明山に及んだわけではなかった。そのため、四明山では、財政や司法をもふくめて一種の自治区ともいうべき政治体制が樹立されていたのである。また寧波を中心に、棄儒社という非合法の結社が組織され、同志的な結束が固められるとともに、太湖周辺や舟山列島と連絡をとりながら、明王朝の回復をめざしての蜂起がはかられた。しかし、明末以来、君主を痛烈に批判し、政治体制のあり方を模索し続けてきた彼らにとって、回復されるべきは、もはや旧体制の下での明王朝ではあり得なかった。明王朝から清王朝へ、一時的にせよ、この地域に生まれた権力の空白状況は、樹立されるべき政権のヴィジョンを、全面的に構想することを容易にしたであろう。

新発見の黄宗羲の『留書』は、このようなレジスタンスのなかで練り上げられていった民族主義の理論であり、『明夷待訪録』は東林党、復社の運動を総括しな

から、レジスタンスの彼方に構想された国家ヴィジョンであった。



彙報 (一九九五年一月より二月まで)

おくりもの

。山田慶兄名誉所員は、京都大学名誉教授の称号を授与された(二月二日付)。

。林 巳奈夫名誉教授は、勲二等瑞宝章を受章(一月三日付)。

。稲葉 稜助手は論文「ガズナ朝のナデーム」(「東方学」八九輯)及びこれと関連する研究活動により、第十四回東方学会賞を受賞(十一月一日)。

訃報

。渡部 徹名誉教授(七七歳)は、三月一日逝去。

。平岡武夫名誉教授(八五歳)は、五月三十一日逝去。

人のうごき

。小野和子(東方部)教授は、停年退官(三月三十一日付)。

。光永雅明(西洋部)助手は、辞任(三

月三十一日付)の上、神戸市外国語大学講師に就任。

。佐々木博光(西洋部)助手は、辞任(三月三十一日付)の上、大阪府立大学総合科学部講師に就任。

。中砂明德(東方部)助手は、辞任(三月三十一日付)の上、神戸女子大学講師に就任。

。阪上 孝教授(西洋部)を当研究所長及び附属東洋学文献センター長に併任(四月一日)一九九七年三月三十一日)。

。三浦國雄大阪市立大学教授は、併任教授(比較文化研究部門、四月一日)一九九六年三月三十一日)。

。串田秀也大阪教育大学教授は、併任助教授(比較文化研究部門、四月一日)一九九六年三月三十一日)。

。森 時彦(東方部)助教授は、教授に昇任(四月一日付)。

。武田時昌信州大学助教授は、当研究所助教授(東方部)に転任(四月一日付)。

。小山 哲島根大学助教授は、当研究所

助教授(西洋部)に転任(四月一日付)。

。塚本 明(日本部)助手は、三重大学人文学部助教授に昇任(四月一日付)。

。籠谷直人名古屋市立大学助教授を、助教授(日本部)に採用(四月一日付)。

。瀧井一博氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)。

。谷 泰教授(西洋部)は九四年一二月一八日大阪発、国立科学研究所センター所属現在イラン世界に関する社会科学研究所門においてJ. P. Diard教授とイランとくにバクチアリの出産期の家畜管理に関する資料の意味についての意見交換及び文献資料蒐集、ミラノ大学図書館に於いて家畜管理に関する研究資料蒐集、アブルツツオ県チエルクエト村に於いて家畜管理についての調査を行い、一月一日帰国。

。小野和子教授(東方部)は、一月四日大阪発、海南省に於いて「中国国際漢学研討会」に参加、一月一〇日帰国。

。小南一郎教授(東方部)は、一月五日大阪発、海南省に於いて「中国国際漢学研討会」に参加、民族学博物館に於いて中国の礼制及び礼学に関する研究

資料蒐集を行い、一月一三日帰国。

。岡村秀典助教（東方部）は、一月七日大阪発、荆州地区博物館に於いて湖北江陵陰湘城遺址発掘調査の打ち合せ及び遺址周辺の踏査、出土遺物の調査を行い、一月一三日帰国。

。田中 淡教授（東方部）は、二月三日大阪発、国立台湾大学、国立中央図書館、故宮博物院、国立自然科学博物館、東海大学、板橋林本源宝園、清華大学に於いて台湾寺廟・庭園に関する共同調査研究・研究資料蒐集・学術交流、孔子廟に於いて古建築調査、龍山寺、鹿港民俗資料館に於いて集落調査を行い、一月二九日帰国。

。田中 淡教授（東方部）は、二月五日大阪発、チャルメルス工科大学に於いて中国庭園に関する共同研究及び研究資料蒐集、スカンセン野外民家博物館及びスウェーデン国立歴史博物館に於いて研究資料蒐集を行い、二月一二日帰国。

。梅原 郁教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、二月二二日成田発、大英図書館・ブラックフライアー

ス分館に於いてスタイン中央アジア蒐集資料の調査と研究を行い、三月二日帰国。

。桑山正進教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、二月二八日大阪発、マトゥラー博物館に於いてストゥーパ資料収集、サンゴール遺跡に於いてストゥーパ遺構の調査を行い、三月七日帰国。

。藤井正人助教（西洋部）は、二月五日大阪発、アディヤール図書館、政府東洋学写本図書館、ケーララ大学写本図書館に於いてサーマ・ヴェーダに関する資料収集、パニヤール村近辺に於いてサーマ・ヴェーダ伝承の現地調査を行い、三月二〇日帰国。

。岡村秀典助教（東方部）は、三月一〇日大阪発、荆州博物館に於いて湖北陰湘城遺址の発掘調査を行い、三月二〇日帰国。

。高田時雄助教（東方部）は、三月一六日大阪発、スタンフォード大学に於いて「中國語法史学会」に出席、三月二一日帰国。

。船山 徹助手（東方部）は、文部省科

学研究費補助金により、三月二一日大阪発、国立博物館に於いて博物館遺物調査、デリー大学図書館に於いて仏教遺跡に関する資料収集、カンヘリー石窟、カルリ石窟、バージャ石窟に於いて石窟寺院遺跡調査を行い、三月三〇日帰国。

。金 文京助教（東方部）は、三月二四日大阪発、復旦大学古籍研究所、北京図書館に於いて中国演劇に関する資料収集、杭州大学に於いて「江南と日本」国際シンポジウムに参加、四月六日帰国。

。富永茂樹助教（西洋部）は、委任経理金により、三月七日大阪発、フランス社会科学高等研究院及び国立図書館に於いて「一九世紀前半における主権の觀念の研究」セミナー出席及び研究者の組織化に関する資料収集、ウィーン大学日本学研究所に於いて研究資料収集を行い、四月一五日帰国。

。岡村秀典助教（東方部）は、四月一三日福岡発、荆州博物館に於いて湖北陰湘城遺址の発掘調査を行い、五月一四日帰国。

。富谷 至助教授（東方部）は、五月二一日羽田発、中央研究院歴史語言研究所に於いて居延漢簡の調査・研究を行い、五月二六日帰国。

。田中 淡教授（東方部）は、在外研究員旅費により、八月六日大阪発、香港中文大學に於いて「中国建築史国際会議」に出席、八月一日帰国。

。稲本泰生助手（東方部）は、七月二六日大阪発、北京大學、故宮博物院、敦煌石窟、敦煌市博物館、酒泉市博物館、丁家溝墓、馬蹄寺石窟、文廟、雷台漢墓、天梯山石窟、甘肅省博物館、陝西歷史博物館、兵馬俑博物館、洛陽博物館、龍門石窟、南京博物院に於いて中国美術史に関する調査及び資料収集を行い、八月二二日帰国。

。前川和也教授（西洋部）は、委任経理金により、七月五日大阪発、大英博物館に於いてシュメール楔形文字粘土板文書の研究を行い、八月二八日帰国。

。富谷 至助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、七月三〇日大阪発、スウェーデン国立博物館、民族学博物館、大英図書館に於いて欧州

所蔵中国簡牘調査及び研究打ち合わせを行い、八月二三日帰国。

。木島史雄助手（東方部）は、八月八日大阪発、上海博物館、洛陽博物館、鞏縣石窟、水泉石窟、商城博物館、龍門石窟、洛陽漢魏故城、閔林石刻藝術館、法門寺、慈善寺石窟、乾陵、永泰公主墓、章懷太子墓、昭陵博物館、葉王山碑林、秦始皇帝陵、山西省博物館、天龍山石窟、晋祠、故宮博物院、歷史博物館に於いて中国石刻資料収集、陝西歷史博物館に於いて王世平宣教部長と學術交流を行い、八月二四日帰国。

。谷 泰教授（西洋部）は、七月二一日大阪発、大英博物館、熱帯研究所、民族学研究所に於いて家畜化起源に関する考古学関係資料蒐集、ケンブリッジ大學に於いてClutton Brock主任研究員と動物考古学、動物行動学等家畜化起源論関係について討議、ベルガモ県北部山村に於いて牧民への聞き取り調査を行い、八月三〇日帰国。

。山本有造教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、八月一七日成田発、社会科学院、吉林省檔案館、吉

林省圖書館、遼寧省檔案館、遼寧省圖書館、大連市檔案館、大連市圖書館に於いて汎アジア圏長期經濟統計データベースの作成に関する統計資料調査を行い、九月五日帰国。

。吉川忠夫教授（東方部）は、八月三〇日大阪発、襄陽師範高等専科學校學術交流センターに於いて「第五回魏晉南北朝史学会及び國際學術討論會」出席、南京大學、隋唐城遺跡に於いて六朝隋唐精神史に関する資料蒐集を行い、九月一二日帰国。

。岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、八月二八日大阪発、国家文物局、北京大學に於いて内蒙古岱海地区における考古調査打ち合わせ、内蒙古文物考古研究所、岱海遺址に於いて考古調査を行い、九月二〇日帰国。

。森 時彦教授（東方部）は、九月四日大阪発、中国近代資料研究センターに於いて中国近代史に関する資料蒐集、国立科學研究センターに於いて「中国の知識文化におけるヨーロッパ思想國際會議」に出席・研究発表を行い、九

月二二日帰国。

。石川禎浩助手（東方部）は、九月四日大阪発、中国近代資料研究センターに於いて中国近代史に関する資料蒐集、国立科学研究所センターに於いて「中国の知識文化におけるヨーロッパ思想国際会議」に出席・研究発表を行い、九月二二日帰国。

。山室信一助教授（日本部）は、九月一日大阪発、国立科学研究所センターに於いて「中国の知識文化におけるヨーロッパ思想国際会議」に出席・研究発表、中国近代資料研究センターに於いて日仏政治思想交渉史に関する資料蒐集を行い、九月二三日帰国。

。狭間直樹教授（東方部）は、九月一日大阪発、国立科学研究所センターに於いて「中国の知識文化におけるヨーロッパ思想国際会議」に出席・研究発表、中国近代資料研究センターに於いて中国近代政治思想に関する資料蒐集を行い、九月二三日帰国。

。齋藤希史助手（日本部）は、九月一日大阪発、国立科学研究所センターに於いて「中国の知識文化におけるヨーロッパ思想国際会議」に出席・研究発表、中国近代資料研究センターに於いて中国近代政治思想に関する資料蒐集を行い、九月二三日帰国。

。ロッパ思想国際会議」に出席・研究発表、中国近代資料研究センターに於いて中国近代文学に関する資料蒐集を行い、九月二三日帰国。

。水野直樹助教授（日本部）は、九月二日大阪発、政府記録保存処、総務庁中央図書館に於いて旧朝鮮總督府文書調査、世宗文化会館に於いて「第八回韓国民族史国際學術シンポジウム」に出席、一〇月一日帰国。

。曾布川 寛教授（東方部）は、委任経理金により、九月一九日大阪発、陝西省考古研究所、秦始皇兵馬俑博物館、彬県大佛寺石窟、広元石窟、四川省博物館、山西省博物館、天龍山石窟、北京大学、故宮博物院、中国歴史博物館に於いて中国美術資料の調査及び蒐集を行い、一〇月四日帰国。

。谷井陽子助手（東方部）は、九月一日大阪発、遼寧大学に於いて入関以前清朝に関する学術交流及び資料調査を行い、一〇月一三日帰国。

。梅原 郁教授（東方部）は、文部省科学研究所補助金により、九月一八日大阪発、国立公文書館、ギメー博物館に

於いてペリオ将来敦煌写本の調査研究、ウフィツイ美術館、市立美術館に於いて敦煌写本に関する資料蒐集を行い、一〇月一八日帰国。

。荒牧典俊教授（東方部）は、一〇月一六日成田発、韓国世界宗教研究所に於いて「第六回日中仏教學術会議」に出席・研究発表、一〇月一九日帰国。

。小南一郎教授（東方部）は、一〇月一九日大阪発、台北故宮博物院に於いて故宮博物院七〇周年記念特別展に係る資料調査を行い、一〇月二二日帰国。

。木島史雄助手（東方部）は、一〇月一九日大阪発、故宮博物院に於いて故宮博物院七〇周年記念特別展に係る資料調査を行い、一〇月二二日帰国。

。横手 裕助手（東方部）は、一〇月一九日大阪発、故宮博物院に於いて故宮博物院七〇周年記念特別展に係る資料調査を行い、一〇月二二日帰国。

。籠谷直人助教授（日本部）は、文部省科学研究所補助金により、一〇月一九日大阪発、香港大学に於いて「近代アジア経済発展における華僑ネットワーク」に関する学会に出席、一〇月二三

日帰国。

。藤田隆則助手（西洋部）は、一〇月一七日大阪発、ロスアンジェルスに於いて「第四〇回民族音楽学会大会」に参加、一〇月二四日帰国。

。田中 淡教授（東方部）は、一〇月一六日大阪発、中国社会科学院考古研究所、故宫博物院、歴史博物館、独楽寺、天龍山石窟、晋祠、山西省博物館、含元殿、漢長安城、陝西歴史博物館、兵馬俑坑、陝西省考古博物館に於いて伝統的文化財保存技術の調査研究を行い、一〇月二六日帰国。

。安富 歩助手（日本部）は、一一月一日大阪発、ソウルに於いて「東北アジアの平和と韓日協力体制の模索」国際学術シンポジウムに参加、一一月六日帰国。

。荒牧典俊教授（東方部）は、一一月一七日大阪発、韓国仏教研究院に於いて「国際仏教学術会議」に参加、一一月一九日帰国。

。曾布川 寛教授（東方部）は、委任経理金により、一一月一五日本大阪発、中央研究院歴史語言研究所、故宫博物院、

台湾大学芸術史研究所に於いて中国美術資料の調査及び蒐集を行い、一一月二三日帰国。

。高田時雄助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、一一月一日大阪発、ローマ国立中央図書館に於いてカトリック宣教師将来の文献調査を行い、一二月一〇日帰国。

。森賀一恵助手（東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、一一月一八日本大阪発、ローマ国立中央図書館に於いてカトリック宣教師将来の文献調査を行い、一二月一〇日帰国。

。稲葉 穰助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、一一月二〇日本大阪発、マドラス博物館、ハイデラバード博物館、デリー博物館、ラホール博物館に於いてストウパー関連の資料収集、タキシラ遺跡に於いて遺跡調査及び資料収集を行い、一二月二〇日帰国。

。船山 徹助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、一一月二〇日本大阪発、マドラス博物館、パトナ博物館、サールナート博物館、ラホール博物館に於いてストウパー関連の資料収

集、タキシラ遺跡に於いて遺跡調査及び資料収集を行い、一二月二〇日帰国。

。稲本泰生助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、一一月二〇日本大阪発、マドラス博物館、パトナ博物館、サールナート博物館、ラホール博物館に於いてストウパー関連の資料収集、タキシラ遺跡に於いて遺跡調査及び資料収集を行い、一二月二〇日帰国。

。桑山正進教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、一一月二〇日本大阪発、マドラス博物館、カルカッタ博物館、デリー博物館、ラホール博物館、インド考古局に於いてストウパー関連の資料収集、タキシラ遺跡に於いて遺跡調査及び資料収集を行い、一二月二二日帰国。

。岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、一二月二二日本大阪発、蘇州市崑山に於いて草鞋山遺址の発掘調査を行い、一二月二五日帰国。

外国人研究員

。Ronald Paul Toby イリノイ大学教

授
近代東アジア世界の構造関連

(日本学客員部門)

受入教官 山室助教授

期間 六月一日～

一九九六年五月三十一日

。Victor Henry Mair ペンシルヴァニア大学教授

中世白話の研究 (比較社会客員部門)

受入教官 高田助教授

期間 七月四日～一九九六年一月三日

招聘外国人学者

。John Allen Tucker ノースフロリダ大学助教授

一八・一九世紀日本における「私」觀念の変遷の研究

受入教官 横山助教授

期間 一月二五日～七月二四日

。Richard Rubinger インディアナ大学教授

一九世紀日本における識字の社会史的研究

受入教官 横山助教授

期間 五月二三日～六月二二日

。許 雪姬 中央研究院近代史研究所研究員

「大東亜共栄圏」の経済構造の研究

受入教官 山本教授

期間 九月二〇日～

一九九六年三月一九日

。錢 婉約 武漢大学歴史系講師

日中近代思想の比較研究

受入教官 狭間教授

期間 一〇月一日～

一九九六年三月三十一日

。李 少軍 武漢大学歴史系講師

近代における中国と日本の工業化政策の比較研究

受入教官 狭間教授

期間 一〇月六日～

一九九六年九月三〇日

。劉 秉虎 延辺大学民族研究所助理研究員

水野助教授

日本統治期朝鮮人の海外移住に関する研究

期間 一一月一四日～

一九九六年五月一三日

外国人研究生

。Hildegard Scheid ヴィルツブルグ大学博士課程大学院生

中国明時代の官営機械と朝貢の関係

受入教官 田中教授

期間 四月一日～

一九九六年三月三十一日

。John Salvatore Lobreglio

一九世紀後半の日本における政治と仏教の社会史的研究

受入教官 横山助教授

期間 四月一日～

一九九六年三月三十一日

。Britte Steger

現代日本における「眠り」の文化学的考察

受入教官 横山助教授

期間 四月一日～七月三十一日

。Andrew Meyer ハーバード大学博士課程大学院生

「五経正義」の研究

受入教官 吉川教授

期間 四月一日～六月三〇日

。秦 小麗 陝西省考古研究所助理研究

員

中国先史文化の考古学研究

受入教官 岡村助教授

期間 一月一日～

一九九六年三月三十一日

。Alexander Des Forges プリンストン大学博士課程大学院生

一九世紀中国の文学に見える民衆宗教

受入教官 金助教授

期間 二月一日～八月三十一日

。李 愛俐娥

ロシア沿海州と中国東北地方における少数民族政策の歴史的研究

受入教官 水野助教授

期間 四月一日～

一九九六年三月三十一日

。William Howard Kelly オックスフォード大学博士課程大学院生

日本の民衆文化、余暇、カラオケを通じて見た日本社会

受入教官 田中助教授

期間 四月一日～

一九九六年三月三十一日

。Wolfram Manzenreiter ウィーン大学日本学研究所研究助手

近代日本の登山文化についての社会学的研究

受入教官 横山助教授

期間 一〇月一日～

一九九六年七月三十一日

。陳 金華 マックス・マースター大学博士課程大学院生

一行禪師の大日経疏における密教の秘密観法と禪宗観法との関係

受入教官 荒牧教授

期間 一〇月一日～

一九九六年三月三十一日

東洋学文献センター講習会

。一九九五年度漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）

第一日（一〇月二日）

図書館とマルチメディア（講義）

大型計算機センター教授

金澤正憲

漢字コードの話——漢字と外字の処理——（講義）

大型計算機センター技官

小澤義明

東洋学文献類目冊子体作成について

（講義）

大型計算機センター技官

河野 典

計算機処理入門（講義）

大型計算機センター技官

隈元榮子

第二日（一〇月三日）

東洋学文献類目の編纂とフォーマット（講義） 村田康彦

漢字典と漢字合成法（講義）

同志社女子大学講師 丹羽正之
日中台における漢字コードの規格

（講義）

大型計算機センター助手

安岡孝一

漢字コードの問題点とISO 10646

UCS（講義）

学術情報センター教授 宮澤 彰

データベース検索（一）（実習）

第三日（一〇月四日）

データベースの概観（講義）

大型計算機センター助手

川原 稔

インターネットの概要（講義）

大型計算機センター助教授

岡部寿男

データベース検索(二)(実習)

第四日(二〇月五日)

データベース作成法(講義)

大阪市立大学教授 柴山 守

インターネットによる情報サービス

(講義)

大型計算機センター助手

石橋勇人

データベース検索(三)(実習)

第五日(二〇月六日)

大学間ネットワークの状況について

(講義)

大型計算機センター技官

櫻井恒正

CD-ROMによる情報サービス

(講義)

大型計算機センター技官

限元榮子

。一九九五年度漢籍担当職員講習会(初

級)

第一日(二一月六日)

漢籍の話(講演)

京大名誉教授

目録法(講義)

竺沙雅章

井波陵一

第二日(二一月七日)

経部書(講義)

カードの作り方(二)(講義)

田中久子

実習(二)

第三日(二一月八日)

史部書(講義)

カードの作り方(二)(講義)

田中久子

実習(二)

第四日(二一月九日)

子部(講義)

禁書について(講義)

東京大学東洋文化研究所教授

岡本サエ

第五日(二一月一〇日)

集部(講義)

実習(三)

森賀一恵

四月五日 インディラ・ガンジー記念国立芸術セ

ンター理事 Kapila Valsayyan (専門はインド美術史。国際交流基金の招きで来日。井狩、藤井が応接し、同センターが中心となって全インド規模で進められている古代サンスクリット写本の記録・保存プロジェクトについて意見を交換した。)

五月一六日 中央研究院近代史研究所研究員 黄福

慶 (専門は中国近代教育史、日中教育関係史。『近代中国高等教育研究 国立中山大学』などの著書がある。狭間が応接し、日本と台湾における研究状況につき、意見を交換した。)

六月一日 ライデン大学名誉教授 Erik Zürcher

ジャワーハルラル・ネルー大学名誉教授・Romila Thapar 女史 (東方学会第四十回大会を記念して招請された両碩学、それぞれ中国佛教史と古代インド史の権威が、京都講演会のために上洛されたの

六月二日 山東社会科学院甲午戦争研究中心主任

を機に懇談会を催した。中国史における禅宗史の位置づけとかウェーダ伝承の保存問題などをめぐって、阪上、吉川、荒牧、井狩、藤井、船山と懇談した。)

戚其章、東北民族学院副院長 関 捷(ともに専門は日清戦争研究。東京で行われた日清戦争百周年の国際学会に参加の後、日本所を訪問。狭間、森、石川が応接し、中国の近代史研究について意見を交換した。)

七月七日 カリフォルニア大学サンタバーバラ校

教授 Joshua A. Fogel ユタ州立大学歴史学部助教授 Joan E. Judge (Fogel 氏はアメリカにおける近代日中関係史の第一人者、邦訳されている著書に『内藤湖南 ポリティックスとシノロジー』があり、日本の中国研究を積極的に英訳紹介していることでも知られる。Judge 氏は近代中国ジャーナリズム史の専門家で

ある。本所における研究体制について意見を交換し、狭間班、森班の班員と交流を深めた。）

十月一日 ローマ国立中央図書館長 Paolo Vane-
ani（西洋書誌学の専門家、古典学者としても著名。国際交流基金の招待で来日。夫人とともに本所を表敬訪問し、文献センターで書庫の見学を行った。阪上、谷、高田が応待した。）

十月二〇日 中国社会科学院近代史研究所研究員
朱宗震（専門は中国近代史。民国政治史について造詣が深く、『孫中山在民国初年の決策研究』などの著書がある。森班の報告を来聴ののち、班員との交流を深めた。）

十月二三日 パリ第四（ソルボンヌ）大学教授 Andre
GUYAUX（共同研究班「象徴主義の研究」を中核とする公開セミナーにおいて、「ボードレールと一九世紀精神」と題する基調講演を行い、その後の質疑応答と討議にも積極的に加わった。）

十一月四日 北京大学教授 張芝聯（中国における
フランス史研究の大家で、中国文化史に

ついても該博な知識を有する。狭間、森、石川が応接した後、文献センターで漢籍を閲覧した。）

十一月七日 西南政法大學法學研究所所長 俞榮根
（専門は儒教法制史。狭間班の研究活動の一部として、「梁啓超の法学思想」の講演をおこなっていただき、所員、班員と意見交換した。）

十一月二五日 清華大學思想文化研究所教授 胡偉希
（専門は中国近代思想史。『辛亥革命与中国近代思想文化』などの編著がある。狭間班の研究会の特別講演会として、梁啓超と明治日本文化について講演をしていただいた後、班員と討論をおこなった。）

十一月二七日 パリ第九大学教授 Pascal Salin（専門
は理論経済学・経済学史。「自由主義——フランスの伝統」の題の講演を行ない、『研究者の組織化』班の参加者数名と議論を交わした。）

十二月三〇日 中国吉林省社会科学院院長 孫乃民（吉
林省社会科学院は、その傘下に十一の研究所を擁する省レベルの総合的人文・社会科学の研究機関であり、省人民政府の

シンクタンクとして機能している。改革開放政策の下、現在その国際化の方向で機構改革を模索しており、当人文研との研究交流等につき阪上、狭間、山本と意見交換を行った。

十二月二四日 北京大学国際政治系主任 梁守德、同

副主任 潘国華（笹川平和財団の招きで来日した。狭間、森、石川が応接、北京大学における近代对外史研究の現状につき意見を交換した後、文献センターで漢籍資料を閲覧した。）



転換期における個人と組織

佐々木 克

この班研究を始めるにあたって、とくに「転換期」としての時期を特定しようとはしなかった。班員それぞれが、自分の興味のある転換期とそこに生きる人物を選んで、その人物と時代との関わり、あるいは組織との関わりを、研究してもらえばよいと思っていたからである。ようするに、簡単にいえば、流れの速い社会における、人間の〈生きざま〉を、多面的にとらえてみようと考えたからである。

人物を研究するときの難しさは、その人間の全体像をある程度把握しないと、論じにくいという点にある。しかしこの研究会では、伝記や年譜を作るのではなく、ある人物の断面、あるいは極端にいうなら、人が潮流や事件と交錯する、その一瞬を描くものであってもかまわない、と言いつづけてきた。

結果として、われわれの研究は、主として一九世紀の日本に生きた人間、ということになったが、たとえば、ある報告では、大阪の俠客を取り上げて、次のよ

うな興味深い事実を明らかにした。彼はアウトローだから、市民の多くに歓迎されている存在ではないが、彼の幕末以来の仕事のひとつが、屎尿の処理と、市街の道や橋などの修理であり、迅速な対応で、それなりに市民から感謝される面もあった。ところが市当局は、その仕事を取り上げて公共事業化してゆく。その結果、俠客は生業の一部を失い、任侠の世界から暗闇のヤクザの道へと移ってゆく。

つまり近代の政治・行政がヤクザを生み出した、その構図の断面を描いてみせたのであった。こうした研究は、口頭でも論文としても、発表する場はかなり限られてしまうのであるが、この研究会では、おおいに歓迎されるのである。このような多彩な人間の〈生きざま〉の研究を集めて、いま班研究の報告書として出版しようと、準備しているところである。人の断面の集積によって、社会の断面を描こう、という目論見でもある。

「明治維新期の研究」は、少数の大論文という構成となったが、今回は多くの班員に、肩の力を抜いた、中・短編を書いてもらうことにした。共同研究の成果報告は、今後多様化の道を歩むことにならざるをえないだろう。そこにいたる過程の、試みの一つであつてもよいと、私は考えている。

『成實論』をめぐる

二つの偶合について

荒 牧 典 俊

北朝では北魏後半期、雲岡・龍門石窟が開鑿され造像活動が盛んであった頃、南朝では南齊から梁にかけてほとんど國家を擧げて佛教文化活動に熱狂した頃、『成實論』という難解極まりない佛教哲學書が、勿然として流行し、そのなる教理を逐一テーゼに取上げては哲學論議して、いわゆる「章」形式の諸論書がつくられた——ということは記録に明らかで、よく知られているのだが、それが何故か、どこが面白いのか、が、まるでわかっていなかった。やはり、そこから始めないと南北朝から隋唐へかけての佛教思想史といっても、原點が定まらない、と考えて、現在では、南北両系ともに傳存を絶つた中で（但し、ごく断片的な引用は知られている）、唯一、敦煌寫本の中に傳存する假題『成實論大義章』の二寫本を解讀することから、共同研究を始めた。案の定、きわめて高度なレベルの佛教教理問答であつて、何を論難し、どう答釋しているか、の論旨をあとづけるのに精一杯で、無味乾燥な研究會

を重ねたのではないか、と怖れるが、それでも、班員の方々の關心に教えられて、いろいろ調べていく間に、二つの偶合に氣がついて、ひよっとすると難問が解けるかも知れない、と思いはじめている。第一は、鳩摩羅什、最晩年の高弟で疊影とともに『中論』『成實論』を徐州彭城の地に傳來したに相違いない道融が、即ち中國石窟寺院中、最古の紀年（A.D. 424）をもつ甘肅省永靖縣炳靈寺一六九窟壁畫に二度、名前の出る道融である、という偶合。もし、この二人の道融を同定してよいのであれば、羅什没し姚興没して長安が未曾有の混亂に陥つた中、道融は、河西地方に避難して、そこで中國佛教史上、最初にさとりをさつた禪者たる玄高とともに修行していたこととなる。そうすると、その道融が、中國撰述經典『梵網經』の傳來者であるから、『梵網經』の成立問題も、あわせて解明できることとなる——道融の空觀修行と玄高の華嚴三昧と疊無識の菩薩戒が出會う、まさしくこの時、この場所、『梵網經』は成立したのだ、と。

第二には、それより四〇年程経つた後で北魏が武力的のみならず、文化的にも南朝劉宋を、どんどん壓迫するようになり、じりじりと國境線を南へ押しやつて、いよいよ徐州彭城を奪取するに先立つて、彼地の高僧三人を平城の都へ招請し、雲岡石窟などで哲學論議さ

せた中の一人、曇度^{トモ}が、即ち南齊王朝が劉宋朝を革命してから、新しい佛教文化の可能性を模索しつつあったとき、ふと、いずこともなく立ち現われて、たちまちのうちに、建康近郊の攝山棲霞寺をして南齊佛教の中心地たらしめ、成實・三論宗の空觀修行の傳統を開基した法度^{ホト}であるという偶合。もし、この曇度と法度を同定してよいのであれば、かの道融によって徐州彭城の地に傳來した『成實論』の傳統が、一たびは、かれらによって北魏平城佛教へと再傳して雲岡大石佛群の造像活動の原動力ともなつてから、さらにこつそりかれひとりによって南齊の攝山棲霞寺佛教へと三傳して、竟陵王子良の多彩な佛教文化活動を開花させていたこととなる。そうすると北朝後半期に流行した『成實論』の哲學論議も、南朝齊梁に繁榮した『成實論』の哲學論議も、實は同根であつたのであつて、この曇度即法度を介して、かの道融即道融へと遡源され、そこには、大乘佛教の根本真理「空」を、いまこの身體存在の三昧のエクスタシーにおいてさとする根本の宗教體驗が芽生えていたのであり、しかもそれが梵網戒運動ともなつていたのである。わたくしは、これは、歴史的に十分に可能である、否、そうでなくてはならない、と考えるはじめている。

コミュニケーションの

社会史——情報と「交通」

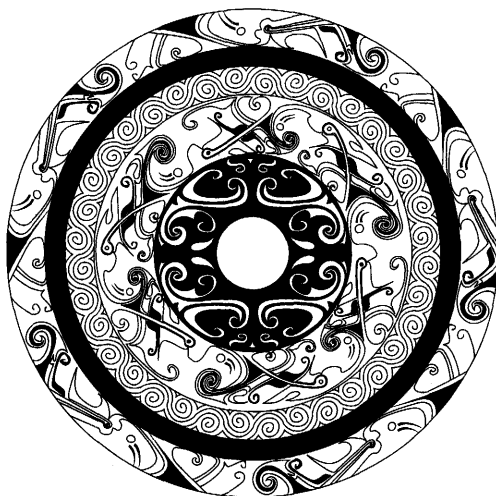
前川 和也

われわれの新しい共同研究のタイトル「コミュニケーションの社会史」の英訳を *Communication in Social History* とする届けを提出してしばらくのちに、デイウィッド・クロリー、ポール・ヘイヤー編（林、大久保訳）『歴史のなかのコミュニケーションメディア革命の社会文化史』（新曜社）が公刊された。この書物の原題は *Communication in History: Technology, Culture, Society* (1991) であった。そして副題の冒頭に「技術」の語が置かれていることからすぐに想像されるように、このアンソロジーには、コミュニケーション・メディアを技術史的な視点から議論する文章がおおくおさめられている。ところで、われわれの共同研究では、電子メディアが発展する以前の諸社会でのコミュニケーション、しかも主に情報伝達の社会的側面をあつかおうと思う。

たとえば紙や木版印刷、活版印刷といったテーマをとりあげるばあいでも、諸メディアがどのように成立、

展開するかという技術史的な側面よりも、それらが社会のどのような分野で、だれによって、どのように用いられたかにより関心がある。印刷物にはなにが書かれ、また、だれがどのような目的で、どのように読んだのか、あるいは見たのか。そしてそれは、読み手の意識をどのように規定していったのか。また印刷物はどのようにして社会にひろがっていったのか。いっぽう印刷物は、たとえば音声による情報伝達と排他的な関係にあるのか。『歴史のなかのコミュニケーション』では、カーター「紙と木版印刷 中国からヨーロッパへ」とオング「印刷、スペース、閉ざされたテキスト」の二論文がおさめられていた。もちろん、われわれの関心は、後者のそれにより近い。

われわれは空間的には、技術の伝播といったことよりも、むしろコミュニケーションのネットワークを考えよう。身ぶり、音声、手紙、印刷物による情報の流通と社会組織のかかわり。ちいさな結社、村落や町のなかでのコミュニケーションも、帝国を維持するための情報伝達の装置、装置内の情報の流れにも、われわれは関心をもつ。ドイツ語でいう「交通」Verkehrに、われわれの関心はかなりの程度まで言い表わされている。



所のうち・そと

東西にとってのコンファレンス

籠谷直人

九五年一〇月二日から三日の三日間、香港で開かれたコンファレンス“Managing Culture: Chinese Organization in Action”に参加した。「華僑ネットワークと日本近代」という論題で報告させていただき、共通の関心を持っている研究者と交流できたことは幸いであった。コンファレンス共通の課題は、世界に展開する中国人社会の特徴を文化形成の視点から検討しようとするもので、参加者の多くは文化人類学者であった。アジア経済関係史に関心のある私としては、語学力の問題もあって十分に報告内容を理解したとはいえないが、交流を通して気づいた点を紹介したい。

「華僑・華人」社会を対象にしたテーマであるだけに、基調演説を含めた四〇の報告をめぐる参加者の国籍は極めて多彩であった。報告には必ず討論者が一名ついたため、簡単に見積もっても参加者は一〇〇名近くだった。このコンファレンスを組織したのは Liu Tik-Sang, Choi Chi-

cheung を始めとする香港技科大学の若手助教授であり、主催者の平均年齢が三五歳と聞いて驚いた。比較的大きなコンファレンスは教授層がオーガナイザーとなる日本とは大きく違うようである。香港では、五年毎に大学内の業績審査が待ち構えており、学術論文の発表も含めて、こうした会議の組織化も審査対象の重要な業績になるらしい。助教授層が自主的にどのような会議を組織したのかという企画力が問われるのである。その他に大学内の「公務」処理も彼らの業績の一部であり、とにかく助教授層の活躍は目立たざるを得ない。若手のエネルギーの放出は表立って大きくなるわけで、会場で Jins 氏らがさらに若い二十歳代の助手たちとともに広い会場内を所狭しと奔走する必死の風景は自ら組織した会議の成功を企図してのものであった。自分に引きつけて、日本でこれだけの規模の会議を組織しなければならぬと迫られたならば、せいぜい一〇名ほどの共通課題を持った人に参加を呼びかけるしかなく、困惑するしかないだろうと考え込んでしまった。組織内の負担の階層的な序列化が極めて厳格であることを認識すると複雑な気分になったが、とにかくこうした若手のエネルギーの吸収によって、組織としての大学の成長は可能になるとの認識が底にはあるようだ。

報告者にはイギリスからの参加者が多く、なかでも学会での重鎮と見なされている年輩の研究者の参加も目立って

いた。重鎮の参加は主催者側としては会議の「権威」付けにつながるものであろうが、重鎮にとっても会議の参加には重要な課題があったようである。全部がそうであるとは言えないが、「こういう有能な若手人材がいいますよ」との会話から始まる、香港内での労働市場の開拓も参加の課題であったようだ。こうした市場開拓は新たに就職しようとするイギリス人の若手に限らず、流動的な市場内にある中堅の研究者にとっても重要な課題のごとくであり、国内から移動を余儀なくされた人材の転職先として海外の機関が目されているようである。日本とは異なり、流動的な労働市場内にいるイギリス人研究者にとって、九七年に中国への返還が迫っているとはいえ香港の各大学は重要な市場であった。そうであるとすれば重鎮らによる国際的な横断的な労働市場の形成はイギリス国内の流動性から来る不安定さを補填する方途とも解釈できる。

香港の若手にとっても、イギリスの重鎮にとっても、コンファレンスは自身が所属する職場の流動性への対応にとって重要な場であったといえる。日本の大学でも「任期」制導入が議論され、流動性による業績の向上が教育研究機関の課題として検討されはじめたが、そうした流動性の導入は、こうした海外にまで及ぶ横断的な市場の用意があつて秩序が保たれるようである。はたしてそうした横断的な市場が日本のなかで用意されているのだろうかと考え

させられた。「また、Work Shopでもやりましょう」と話してくれたChoiさんに、「こちらこそ願います。日本にお呼びできればよいですね」と応えて三日間を終了した。さぼりがちの「ラジオ英会話」がしばらく継続しそうだ。



日中共同発掘のはじまり

岡村 秀典

一九九五年は日本の中国考古学にとって、新たに中国での発掘調査がはじまった、記念すべき年となった。

革命前の中国では、わが旧東方文化学院をはじめとして、多くの外国隊が中国の学術調査で大きな成果をあげたが、革命後は、一九六〇年代の遼寧における中朝共同発掘をのぞいて、外国人の考古学調査は認められなかった。一九八〇年代になっても、発掘現場を見学したり、出土文物を手にとつて観察することすら容易なことではなかった。しかし、近年の改革開放政策は、考古学の分野によりやく新しい学術交流の局面をつくりだした。一九九一年、「中華人民共和國考古涉外工作管理弁法」が施行され、外国との共同調査がその法律の認める範囲で可能になったのである。

そのころ私は大手前女子大学の秋山進午さんと遼寧省文物考古研究所と共同で先史遺跡の測量調査を実施していた。遺跡の測量は中国の考古学では従来あまり重視されていないこともあり、それなりの成果があったけれど、表面的な測量による調査では、まことに隔靴搔痒、遺跡からえられる情報量が格段に少ない。新しい研究を開拓するには



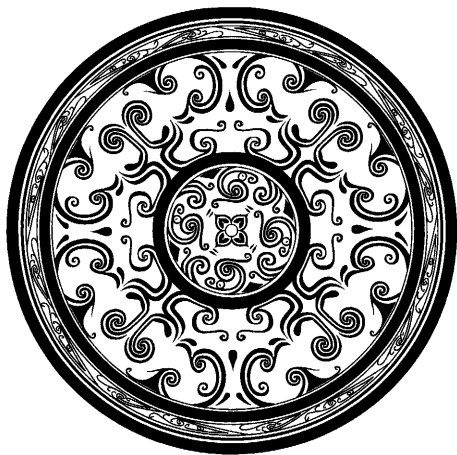
どうしても発掘が必要だとそのとき痛感した。

いっぽう、米国隊はさっそく旧石器文化や農耕起源を課題とする共同発掘を開始し、自然科学的分析を取り入れたその調査方法は中国でも話題となった。日本では欧米にまさる東洋学の蓄積を誇っているものの、こと中国考古学にかんしては長くフィールドから遠ざかっていたために、発掘の一步がなかなか踏みだせないでいた。米国に先を越されたのは悔しい。けれど、発掘経験が豊富で自尊心の高い中国の学者に共同発掘をもちかけるには、相応の目的と方法などの裏づけが不可欠だ。認可権をもつ中国国家文物局のハードルも高い。様子をうかがうこと三年、ようやくその突破口を開く条件が私のまわりに整ってきた。

いま世界に誇りうる日本の調査方法のひとつは、生活域たる集落址と生産域たる稲作水田址の総合的調査である。この調査方法を応用するにふさわしい遺跡が長江中流域で近年見つかったのである。それは集落のまわりに城郭を築いた紀元前三〇〇〇年ごろの遺跡で、いままでのところ中国最古の城郭といえる。城郭都市の起源と国家の形成過程を集落と農業生産の両面から調査研究しよう、という私の提案を湖北荊州博物館が受け入れ、一年近い折衝をへて、一九九五年三月、湖北陰湘城遺跡において戦後はじめての日中共同発掘の鍬が振り下ろされたのである。

敗戦からちょうど五十年、中国での発掘を自分の手では

じめられたことは率直に言ってうれしい。しかし、発掘を目的化しても意味がなく、むしろ日本の新しい中国考古学の出発点に立った、その重みを十分に自覚したいと思っている。



「コジンスキイの健康を祝す！」

小山 哲

鵬外の『普請中』に「コジンスキイ」というポーランド人が登場する。正確に言うと、当人は姿を見せず、名前だけが、主人公の参事官と、彼を日本に訪ねてきたドイツ人女性との会話のなかに出てくる。女は歌手で、コジンスキイは彼女の伴奏役である（もともと、伴奏するのは歌だけではなさそうだが）。ふたりはウラジオストクで興行したあと、アメリカに渡る途中、日本に立ち寄ったところである。主人公はコジンスキイの名前を聞いて「あのポラックかい」と嘲り（ドイツ語の Polacke は蔑称である）、最後に“Kosinski soll leben!”と杯を上げて女を突き放す。参事官は鵬外の分身で、女にはエリスが投影されているといわれるが、『舞姫』の感傷はもはやなく、かつての恋人に対するまなざしは冷ややかである。しかも「ポラック」を伴奏相手とすることで、国家官僚と女旅芸人の落差がいつそう強調されている。このポーランド人への見下した視線もまた、鵬外がドイツから持ち帰ったもののひとつに違いない。わたしは近世のポーランド史が専門で、当時の日本は鎖国中だから交流もあるまいと思ひ込み、日ポ関係史につい

てあまり深く考えたことはなかった。ところが、たまたま一九九三年から一年間ワルシャワ大学日本学科で教える機会があり、その間、自分なりに彼等の過去のつながりにも思いをめぐらすことになった。このとき、日本学科や韓国学科の同僚の先生方から意外なことを教わった。ポーランド人はずいぶん早くからシベリア経由で極東に入りこんでいるというのだ。調べてみると、すでに一六世紀末には対モスクワ戦で捕虜になったポーランド人がシベリアに送られている。一六八九年のネルチンスク条約はロシア語、中国語、ポーランド語の三言語で書かれた。一八世紀末以降はロシアの支配下で政治犯が多数シベリアに流刑され、技術者や労働者として極東に赴く者も多かった。M・ツァバノフスキ『満州の秘密——ハルビンのパポーランド人』（ワルシャワ、一九九三年刊）によると、東清鉄道の拠点としてハルビンを選定し、町の基礎を築いたのはアダム・シドウォフスキというポーランド人技師であった。その後も多い時期には約七千人のポーランド人がハルビンに暮らし、のちに七三一部隊の犠牲となった者もいると推定されている。つまり、極東には数百年来、たくさん「コジンスキイ」たちがいて、そこでやがて日本との関わりも生じたのである。

いつか機会があれば、鵬外とは違った眼で彼らの足跡をたどれないかと考えている。

書いたもの一覧 一九九五年一月～十二月（氏名五十音順） ●は単行本）

飛鳥井 雅 道

テクニストとしての神話——本居宣長・上田秋成論争とその周辺

人文学報 七五号 三月

荒 牧 典 俊

漢晉壁画墓及び副葬遺物に佛像が出現する意味について

上・下 中外日報 十一月

井 狩 彌 介

●A Study of the Nilamata, Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir (ed.), Institute for Research in Humanities, 1994.

五月

Ādi-Purāṇa (co-author), A Study of the Nilamata, Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir (ed. Y. Ikari), Institute for Research in Humanities, 五月

A Map of Ancient Tirthas in Kashmir Valley, A Study of the Nilamata, Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir (ed. Y. Ikari), Institute for Research in Humanities, 五月

岩田さんのまなざし『岩田慶治著作集 七 生命のかたち』 月報8 講談社 十月

新発見のヴァードウーラ・シュラウタストラ写本とその評価『インド思想史研究』七 十一月

石 川 禎 浩

中国「ニセ」共産党始末——近藤栄蔵の接触した中国の「共産

党——

颯風 三〇号 一月

関於陳望道翻訳的『共産党宣言』

青年时期的施存統——上海党史研究 一九九五—二 三月

「日本小組」與中共建党的過程——

中共党史研究 一九九五—三 五月

一九二〇年代中国における「信仰」のゆくえ——一九二二年の

反キリスト教運動の意味するもの——狭間直樹編『一九二〇年代の中国』

留學日本期間的施存統 檔案與史學 一九九五—五 十月

稲 葉 穰

アラブ・ムスリムの東方進出 板垣雄三監修・堀川徹編『講座

イスラーム世界3 世界に広がるイスラーム』

栄光教育文化研究所 一月

ガズナ朝のナディーム 東方学 八九輯 一月

上 野 成 利

S・フェルマン「声の回帰——クロード・ランズマンの『ショ

アー』(中)」（共訳） 批評空間 II—五号 四月

S・フェルマン「声の回帰——クロード・ランズマンの『ショ

アー』(下)」（共訳） 批評空間 II—六号 七月

●S・フェルマン「声の回帰——映画『シヨアー』と『証言』の

時代』(共訳) 太田出版 九月

書評・藤田省三『全体主義の時代経験』

vol. 一〇〇号 十二月

ホルクハイマー——批判的社会理論の射程 藤原保信・飯島昇

藏編『西洋政治思想史・II』 新評論 十二月

宇佐美 齊

一房の髪『ジュール・ルナール全集』月報2

臨川書店 一月

詩と思想における才能の発現と年令 発達 六一号 一月

書評・河島英昭『ウンガレット』 詩人の生涯

産経新聞 二月六日

翻訳・アリュー「鳥羽3」 谷川俊太郎『旅』別冊

思潮社 二月

詩歌の起源と転変——人文学における詩学の位置とその課題

山田慶兒・阪上孝編『人文学のアナトミー』 岩波書店 四月

書評・モラヴィア『豹女』 産経新聞 四月一七日

書評・モラヴィア『あつかましき人々』 産経新聞 五月二九日

書評・清水昶『天皇陛下の銀時計』 図書新聞 七月二二日

訳注・悪い血(アルチュール・ランボー『地獄の季節』より) P&T 三号 十一月

清水昶の三つの空間 現代詩文庫『続・清水昶詩集』解説

思潮社 十二月

梅原 郁

「花と中国文化」連載八回

週刊 朝日百科「植物の世界」 一月八日〜二月二六日

書評・鳥居一康『宋代税政史研究』

法制史研究 四四 三月

刑は大夫に上らず——宋代官員の処罰——

東方学报 京都六七冊 三月

元史刑法志訳注(上)

東方学报 京都六七冊 三月

●宋会要輯稿編年索引

京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター 三月

中国史縦横に体系づけ 宮崎市定氏を悼む

朝日新聞夕刊 五月二九日

大浦 康 介

文学についての学問は可能か——漱石にみる文学と科学 山田

慶兒・阪上孝編『人文学のアナトミー』 岩波書店 四月

岡村 秀 典

●東北アジアの考古学研究(共著)

同朋舎出版 二月

ひつぎの出現と変容 福岡からアジアへ2

西日本新聞社 二月

京都大田南五号墳と青竜三年銘鏡

平凡社百科年鑑 一九九五 四月

漢・六朝代の紀年鏡

考古学ジャーナル 三八八 五月

医系類型論とマルクス主義考古学

展望考古学 考古学研究会四〇周年論文集 六月

古代中国の瓷器製作技術

しにか 六巻七号 七月

灰釉陶(原始瓷)器の出現

日本文化研究 七号 七月

楽浪出土鏡の諸問題

考古学ジャーナル 三九二 九月

湖北陰湘城遺址の日中共同調査 福岡からアジアへ3

西日本新聞社 十一月

湖北陰湘城遺址一九九五年春の調査

日本中国考古学会報 五号 十一月

落合 弘樹

ある古河藩士族の幕末・明治 茨城県史研究 七四号 三月
明治政府と華士族 西川長夫・松宮秀治編『幕末明治期の国民
国家形成と文化変容』 新曜社 三月

籠谷 直人

開港後の対アジア貿易と直輸出態勢の模索——日本昆布会社を
事例にして——オイコノミカ 三一巻 二一四合併号 三月
渋沢栄一 吉村武彦他編『日本の歴史を解く一〇〇人』

文英堂 九月

「地主制」論と「物価史」論

経済学雑誌 十二月

勝村 哲也

電子で虫害を防ぐ法

飛船 八号 四月

読み・書き・ソロバン

しらかわ 二〇号 十一月

京都大学人文科学附属東洋学文献センターにおけるデータベ
スの概要 全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セ
ミナーシリーズ 一号 十一月

JISXO二二一をめぐる諸問題——付、JISXO二二一

二四 ドットフォント出力見本——全国文献・情報センタ
ー人文社会科学学術情報セミナーシリーズ 二号 十二月

東洋学における漢字計算機処理の現状

人文科学と情報処理 一〇号 十二月

木島 史雄

六朝前期の孝と喪服——禮學の目的・機能・手法—— 小南一
郎編『中國古代禮制研究』 京都大学人文科学研究所 三月

金 文京

●続・中国語教授法試案（共著）

慶応義塾大学言語コミュニケーション研究所 三月

王昭君愛文考

中国文学報 五〇号 四月

俗語考証二則

中国古典小説研究 一号 六月

山人李白——詩人の伝説とその生活

しにか 六巻六号 六月

●広東木魚書目録（共著）

「三國志演義」版本試探——以建安諸本為中心『三國演義叢
考』 好文出版 七月

「三國志演義」与「花関索伝」『三國演義叢考』 北京大学出版社 七月

従秉燭達旦談到『三國志演義』和『通鑑綱目』的関係『三國演
義叢考』 北京大学出版社 七月

●「朱鼎臣本三國志史伝」前言『三國志演義古版叢刊五種』之
六 中華全国圖書館文献縮微中心 七月

羅貫中 本質 中国学報（韓国中国学会） 三五輯 七月

弥勒と布袋——中国民衆の弥勒像 しにか 六巻一〇号 十月

●桑山 正進

Dating Yasovarman of Kanauj on the Evidence of Huichao.
Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities,
Kyoto University, 29. 三月

Shah-jiki Dheri 主塔の遷變 東方學報 京都六七冊 三月

七世紀「西域」の情報源 月刊本の窓 五月号 五月

アフガニスタン考古学の七〇年 AERA 三八〇号 六月

●西域記（地球人ライブラリー） 小学館 七月

小南 一郎

●中国古代礼制研究 (編著) 京都大学人文科学研究所 三月

射の儀礼化をめぐる——その二つの段階『中国古代礼制研究』 三月

説話伝承学 Vol.3 編集後記 説話伝承会 四月

語から説へ——中国における「小説」の起源をめぐる 中国文学報 五〇冊 四月

元白文学集団の小説創作——「鶯鶯伝」を中心にして 日本中国学会報 四七集 十月

「史記」世家 筑摩学芸文庫「史記(世家下)」解説 十月

「世説新語」の美学——魏晉の才と情をめぐる 中国中世史研究会編『中国中世史研究統編』 十一月

小山 哲 ヴィスワ河畔で日本史を語る——ワルシャワ大学日本学科講師

体験記——島根史学会会報 一七号 九月

ポーランドと西欧 朝治啓三・江川温・服部良久編『西欧中世史 下 危機と再編』 ミネルヴァ書房 十一月

齋藤 希史 朱子語類讀書法篇譯注 (三) (共著) 中國文學報 五〇冊 四月

朱子語類讀書法篇譯注 (四) (共著) 中國文學報 五一冊 十月

阪上 孝 著者に聞く 河野健二『近代を問う』全三巻・各巻付録 岩波書店 一〇三月

●『人文学のアナトミー』(山田慶児と共編) 岩波書店 四月

ボナバルティズムをめぐる(共同討議) 批判空間 二巻六号 六月

●フュレ/オズーフ『フランス革命事典1・2』(共訳) みず書房 七・十月

公衆衛生の誕生——「大日本私立衛生会」の成立と展開 経済論叢 一五六巻四号 十月

佐々木 克 明治天皇のイメージ形成と民衆 西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』 新曜社 三月

東京はいつどのようにして首都となったのか(インタビュー構成) 別冊『宝島 帝都東京』 四月

京都の再生——近代の出発——『京都の歴史』四 京都新聞社 七月

西郷隆盛 吉村武彦他編『日本の歴史を解く一〇〇人』 文英堂 九月

金剛輪寺と草莽の志士たち 秦荘町歴史文化資料館特別展示目録 十月

井伊直弼『幕末江戸』 学研 十二月

鈴木 啓司 基礎論、あるいは無限を語ることに——数学と哲学を題材に 山田慶児・阪上孝編『人文学のアナトミー』 岩波書店 四月

翻訳・ドニ・リシェ『イタリア戦役』 フュレ/オズーフ 四月

ランス革命事典1』 みず書房 七月

曾布川 寛

金農と博學鴻詞科 『中国書論体系』 月報一四 二玄社 一月

「清朝中期の書画」解説 澄懷堂美術館 三月

漢・三国佛教遺物の図像学——西王母和佛——(潘秋楓訳) 東南文化 第二期 四月

兵馬俑的写真芸術(黄雪美訳) 田静編『秦俑藝術論集』 五月

王維『輞川図巻和風水論(憑慧芬訳) 藝苑 第三期 六月

泰山・西王母ほか 『歴史学事典』第三巻「かたちとしるし」

「清朝後期の書画」解説 弘文堂 七月

書評・マイケル・サリヴァン著『中国山水画の誕生』 澄懷堂美術館 九月

秦兵馬俑與秦的軍隊(黄雪美訳) しにか 六卷一〇号 九月

馬王堆漢墓・武氏祠 文博 第五期 十月

高田 時雄 しにか 七卷一号 十二月

Boudhisme chinois en écriture tibétaine: Le Long Rouleau

chinois et la communauté sino-tibétaine de Dunhuang.

Boudhisme et cultures locales. Quelques cas de recipro-

ques adaptations. Actes du colloque franco-japonais de

septembre 1991, EFEO, Paris. 九四年十二月

漢字の憂鬱 現在の問題とその将来 しにか 六卷五号 四月

(紹介) 河野六郎・西田龍雄著『文字叢眞』

月刊言語 二四卷一一号 十月

篆隸萬象名義解説 『定本弘法大師全集』第九卷

高野山大學密教文化研究所弘法大師著作研究會 十一月

味噌と刀

敦煌莫高窟 月刊言語 二五卷一号 十二月

ヴァチカン圖書館の中國關連蒐集について しにか 七卷一号 十二月

● *Inventaire sommaire des manuscrits et imprimés chinois*

de la Bibliothèque Vaticane, par Paul Pelliot, revised and

edited by TAKATA, Italian School of East Asian Studies,

Kyoto. 日佛東洋學會通信 第二〇号 十二月

瀧井 一博 翻訳・ローレンツ・フォン・シュタイン著「日本帝国史および

法史の研究」『Jurisprudentia 國際比較法制研究』四

田中 淡 シネルヴァ書房 六月

ナンシー・シャツマン・スタインハルト「青竜寺の密教仏堂——

唐代建築の空間、儀式および古典主義」(共訳) 仏教芸術 二二〇号 五月

The Appearance and Background of the Lou 樓: Multistor-

eyed Timberwork Towers in Ancient China, Hashimoto

Keizo et al(ed), *East Asian Science: Tradition and*

Beyond, Kansai University Press. 七月

日本建築学会編『東洋建築史図集』(共同執筆) 彰国社 七月

鋪地——中国庭園へのアプローチ 『鋪地・中国庭園のデザイ

ン』 INAXブックレット 九月

聖なる空間表象としての傘蓋 『傘——和傘・パラソル・アン

ブレラ』 INAXブックレット 九月

池中の造花——中国庭園にみる遺俗 まほら 五月 十月
中国建築度量上の基本単位——「分」 趙令揚・憑錦榮合編『亜
洲科技與文明』

明報出版社（香港） 十月

田中雅一

●翻訳・アデル・ゲティ著『女神——生ける自然の母』（共訳）イ

メージの博物誌三〇

平凡社 一月

犠牲者の声を聞く 水曜フォーラム 京都新聞 二月二二日

マンガーの木に変身した魔神（インド） おはなし博物館・世

界のくから四二二 毎日新聞夕刊 三月一五日

人類学のパラダイム——理論と親族 米山俊直編『現代人類学

を学ぶ人のために』 世界思想社 三月

スリランカ漁民社会のジェンダー 中村尚司・鶴見良行編『コ

モンズの海——交流の道、共有の力』 学陽書房 四月

ダンスコンテストに負けた女神（インド） おはなし博物館・世

界のくから四六 毎日新聞夕刊 四月二四日

人類学のパラダイム転換——エヴァンス・プリチャードとリ

チをめぐる 山田慶児・阪上孝編『人文学のアナトミー』

岩波書店 四月

ヒンドゥー教の再生——アヨーディア問題の理解に向けて 田

辺繁治編『アジアにおける宗教の再生——宗教的経験のポリ

ティクス』 京都大学学術出版会 五月

性的人类学 『AERA Mook 8 人類学がわかる。』

朝日新聞社 六月

南アジアにおける宗教ナショナリズム——スリランカとインド

慶応義塾大学地域研究センター編『民族・宗教・国家——現

代アジアの社会変動』

現代スリランカの民族問題——一九九五年七月までの展開

慶応通信 八月

タミル・イスラーム解放の虎・バンダラナヤカ・ジャヤワ

ルダナ・スリランカ・タミル難民・タミル問題・シンハラ・

オンリー・JVP・マハウェリ水系開発 梅棹忠夫監修『世

界民族問題事典』 平凡社 九月

書評論文再論——杉本良男氏への反論・杉本氏の応答によせて

南アジア研究 七号 九月

ゲリラ青年と駆け落ち少女

月刊みんぱく 一九卷一〇号 十月

特別研究メモ・日本の性文化の伝統と変容——性のオリエンタ

リズムへの視座 民博通信 第七〇号 十月

庶民信仰における自己肯定・自己否定・他者否定——ヒン

ドゥー奉納儀礼の構造と民衆宗教画の変貌をめぐる 楠正

弘編『宗教現象の地平——人間・思想・文化』

岩田書院 十一月

宗教と暴力——寡婦を殺す二つの方法 『AERA Mook 11

宗教がわかる。』 朝日新聞社 十二月

谷 泰 考古学的意味での家畜化とは何であったか——人・羊・山羊間

のインタラクションの過程として 人文学報 三月

言葉の背面——笑いの自己言及的機能について 山田慶児・阪

上孝編『人文学のアナトミー』 岩波書店 四月

解説・その後の今西遊牧論 今西錦司『遊牧論そのほか』

平凡社 九月

乳利用のための搾乳はいかにして開始されたか——その経緯と背景
西南アジア研究 四三 九月

家畜化の起源をめぐる 福井勝義編『自然と人間の共生』

雄山閣 九月

自然管理者としての人間の位置——人はなぜ神に似ているのか

川田順造編『ヨーロッパの基層文化』 岩波書店 十一月

家畜去勢と人間去勢 大航海 七 新書館 十二月

道具進化についての言語の意味 霊長類学研究 一一 十二月

谷井陽子

清代則例省例考 東方學報 京都六七冊 三月

富永茂樹

著者に聞く 河野健二『近代を問う』全三巻・各巻付録

岩波書店 一〜三月

北欧で見たこと、南欧について聞いたこと 西川長夫・松宮秀

治編『米欧回覧実記』を読む 法律文化社 三月

ソロモンの館へようこそ——社会装置としての学問をめぐる

山田慶児・阪上孝編『人文学のアナトミー』岩波書店 四月

●フュレ／オズーフ『フランス革命事典1・2』（共訳）

みすず書房 七・十月

富谷至

●古代中国の刑罰 中央公論社 七月

狭間直樹

武漢時期国共両党関係と孫中山思想——以農民問題と革命領導
権・共産党武裝問題を中心 近代史研究 一九九五年第一期

孫文 “興亜”求めた生涯 朝日新聞夕刊 三月一日

試論孫文逝世前後有関的社会評價 国父建党一百周年學術討論

集編輯委員會編『国父建党一百周年學術討論集』第一冊

近代中国出版社 三月

我对研究中国国民党党史的意见 近代中国 一〇六期 四月

“国父建党革命——百周年學術討論會”に参加して

孫文研究 一八号 七月

『東邦協会会報』掲載の孫文「支那保全分割合論」

孫文研究 一八号 七月

吉野作造と中国——吉野の中国革命史と日中関係史について

『吉野作造選集』第七巻 岩波書店 八月

●『一九二〇年代の中国』（編著） 汲古書院 九月

吉川先生のこと『吉川幸次郎遺稿集』第三巻月報 筑摩書房 十二月

藤井正人

古代インド宗教歌詠の思想性——哲学生成の一断面 山田慶

児・阪上孝編『人文学のアナトミー』 岩波書店 四月

On the Textual Formation of the Nīlāmata-Purāṇa, A

Study of the Nīlāmata Aspects of Hinduism in Ancient

Kashmir. (ed. Y. Ikari), Institute for Research in Human-

ities, Kyoto University, 1994. 五月

藤田隆則

能の写実的な解釈について——相対化の試み

人文学報 七五号 九四年十二月

音楽・舞踊からみた日本人のテンポ

体育の科学 四五巻一号 一月

能の「古式地拍子」再考——歌い手の心のなかのリズム・パターン

楽劇学 二号 三月

歌の上演における独唱形態と合唱形態——世阿弥『習道書』の一節を読むためのモデル 山田慶兒・阪上孝編『人文学のアナトミー』 岩波書店 四月

古典音楽伝承の共同体——能における保存命令と変化の創出 福島真人編『身体構築学』 ひつじ書房 五月

「謂れなき人」のはたらき——能におけるツレと多人数合唱（上） 月刊百科 三九一号 五月

フィールドワークされる日本音楽

日本音楽学会関西支部通信 五五号 六月

「謂れなき人」のはたらき——能におけるツレと多人数合唱（下） 月刊百科 三九三号 七月

能の演出における「主役二人主義」 能 四四六号 七月

観世 六二巻一〇号 十月

見所に雑音を有の目付・無の目付 能 四五一号 十二月

船山 徹

Remarks on Religious Predominance in Kashmir: Hindu or Buddhist? Y. Ikari (ed.), *A Study of the Nilamata*

Aspects of Hinduism in Ancient India, Institute for

Research in Humanities, Kyoto University, 1994. 五月

六朝時代における菩薩戒の受容過程——劉宋・南齊期を中心に

東方学報 京都六七冊 三月

八世紀ナールランダー出身注釈家覚え書き——仏教知識論の系譜

日本仏教学会年報 六〇号 五月

同（再版） 日本仏教学会編『仏教における誓願』

平楽寺書店 八月

Arcaja, Santaraksita, Jinendrabuddhi, and Kamalasila on the Aim of a Treatise (gravyana), *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie* 39. 三月

前川 和也

「都市革命」あるいは都市社会の成立——古代メソポタミアにおける 山田慶兒・阪上孝編『人文学のアナトミー』

岩波書店 四月

The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (X), *Acta Sumerologica* 17 (1995). 七月

水野 直樹

歴史研究の対象となる金日成 京都新聞 一月六日

（大韓民国臨時政府）金奎植など七項目『朝鮮人物辞典』

大和書房 五月

蘇る『アヒランの歌』の主人公 図書 五五四号 八月

私にとっての在日朝鮮人史研究

在日朝鮮人史研究 二五号 九月

韓国民族運動 治安維持法『韓国の民族独立運動と光復五〇年』シンポジウム報告論文集（ソウル） 九月

朝鮮半島 親日派など七項目『世界民族問題事典』

平凡社 九月

親日派 選挙法にひそんだ偏見——定住外国人の参政権・「戸籍条項」の成立事情

(共同通信配信) 京都新聞 十二月二日

麥谷 邦夫

Daoci: Existence Between God and Man., Yosio Kawakita, Shizu Sakai and Yasuo Ouka ed., "The Comparison between Concepts of Life-Breath on East and West", Ishiyaku Euro America, Inc. 一月

中国養生文化の伝統と益軒 横山俊夫編『貝原益軒——天地和楽の文明学——』 平凡社 十二月

森 時彦

人口論の展開からみた一九二〇年代の中国 狭間直樹編『一九二〇年代の中国』 汲古書院 九月

矢木 毅

朝鮮における進士概念の変遷 東洋史研究 五四卷三号 十二月

安 富 歩

満鉄の資金調達と資金投入 人文学報 七六号 三月

The emergence and collapse of money, *Physica-D* 82 四月
書評・黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』の論理構造について 中国現代史研究会『中国現代史研究会通信』三期四号 三月

森嶋教授の『アジア経済共同体論』に対するコメント ハンリム

ム大学日本学研究所開所記念シンポジウム「東アジアの平和と日韓協力体制をさぐる」評論資料集 十一月

山室 信 一

明治国家と清末中国——井上毅に関連して——

国学院法学 三二巻三号 一月

書評・土屋健治『インドネシア——思想の系譜』

熊本日新聞 一月三〇日

書評・溥傑『溥傑自伝』

週刊文春 三月一六日

書評・石川九楊『書とはいかなる芸術か』

熊本日新聞 三月二七日

体験が終わるとき——「戦後」私感 産経新聞夕刊 四月八日

書評・三谷太一郎『新版大正デモクラシー論』

熊本日新聞 五月二日

二十世紀日記抄——『溥儀日記』 TH IS IS 読売 七月

書評・西川長夫他編『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』

図書新聞 七月八日

書評・ロナルド・タカキ著『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』

熊本日新聞 七月一六日

幻の国家・満州国の境涯 『満州の記録』 集英社 八月

書評・久世光彦『マイ・ラスト・ソング』 毎日新聞夕刊 八月二日

戦後五〇年の「満洲国」 熊本日新聞 九月一〇日

書評・李沢厚『中国の伝統美学』 中央公論 九月

書評・三島靖『木村伊兵衛と土門拳』 中央公論 九月

井上毅 吉村武彦他編『日本の歴史を解く百人』

文英堂 九月

住宅・土地をめぐる法政思想の基底——欧米・日本・中国を事例として——『住宅・土地問題研究論文集』二〇集 九月

時と空を駆けけた人——土屋健治氏の人と学問 総合的地域研究

一〇

文部省重点研究事務局 九月

邂逅、謝恩そして希望 『北京日本学研究中心成立十周年記念集』 十月

書評・中村祐悦『白団』 中央公論 十月

清末知識人の西洋学習と日本学習 『日中文化交流史叢書3・思想』 大修館 十月

対談・〈アジア〉の自画像をいかに描くか (川村湊氏と) 世界 六一四号 十月

書評・杉田英明『日本人の中東発見』 中央公論 十一月

書評・伊原青々園・後藤宙外編『唾玉集』 中央公論 十二月

山本有造

書評・杉山伸也『明治維新とイギリス商人』

三田学会雑誌 八七巻四号 一月

●(新版)『満洲国』の研究』(編著) 緑蔭書房 四月

書評・Toshio Suzuki, Japanese Government Loan Issues on the London Capital Market 1870-1913. 社会経済史学 六一巻三号 八月・九月

京大広報 四九三号 十一月

人文研の共同研究

横山俊夫 校訂・木田安彦著『諸国名所』 河出書房新社 一月

寸評・特注風呂 毎日新聞 一月三日

人間・生物・時間——さまざまな時間を求めて—— 第五回研究会記録(田中雅一氏と共編)所収横山論文・占いをめぐる

時間の揺らぎ——『好色萬金丹』と三世相 株式会社けいはんな 二月

きもの産業二一世紀のビジョンと提言(佐和隆光・浅田彰両氏

と共同執筆・討論/横山執筆担当第二章現状と課題)フリート臨時特集号 財団法人京都和装産業振興財団 三月

発言校訂・第四回世界歴史都市会議報告書 セッションIIについて 京都市 三月

発言校訂・Comments from the commentator, SessionIII, The 4th World Conference of Historical Cities, General Report. 京都市 三月

報告記録・風流の都けいはんな、および討論記録(梅棹忠夫・熊倉功夫・高階秀爾ら六氏と)「地域と世界と」芸術文化の未来」 財団法人関西文化学術研究都市推進機構 三月

監修・校訂/Things Japanese: Mizuhiki, the String that Speaks the Heart, Sunimoto Quarterly, spring 1995, No. 60. 三月

討論記録・生態学からみた安定社会——安定と攪乱、淡水域の生物群集から—— 川那部浩哉・遊磨正秀両氏編(第五回京都国際セミナー) 京都ゼミナールハウス 三月

Marathon Seminar—"Humans, Other Living Things, & the Nature of Time" Keihanna Annual Reports 90-94. 三月

Keihanna Interaction Plaza, Inc. 共同執筆・外文明と内世界(土屋健治・西村重夫ほかB01計画研究班)総合的地域研究の手法確立——平成六年度の活動の記録」 文部省重点領域研究事務局 三月

時計捨て「ヒトの時間」の森——伝統的感覚回復への実験セミナー開催 日本経済新聞 四月一日

和風と和装、ひと言

織研新聞 四月一二日

日本文化研究誕生のころ——一九世紀イギリスを中心に

国際交流 七巻三号(通巻六七号) 国際交流基金 四月

共同編集・こうとうけん 九号財団法人国際高等研究所 四月

校訂・「時間の森へ」マラソンセミナー「人間生物時間」が贈る対話・体感・実験のひととき「けいはんな発」

株式会社けいはんな発

株式会社けいはんな 四月

討論参加／翻訳(梅棹忠夫氏発言部分)・*The End of the Century, The Future in the Past*, by the Japan Foundation:

N. Hagihara, A. Iriye, G. Nivat & Ph. Windsor, eds.,

Tokyo, New York, London: Kodansha International. 六月

監修・校訂・Things Japanese: *Engi-mono*, Created by People's Desire for Personal Happiness, *Sumitomo Quarterly*,

summer 1995, No. 61. 六月

企画・討論参加・平安建都一二〇〇年記念 伝統と創世フォーラム集成 河合隼雄・森谷勉久監修、松岡正剛構成

企画・討論参加・平安建都一二〇〇年記念 伝統と創世フォーラム集成 河合隼雄・森谷勉久監修、松岡正剛構成

企画・討論参加・平安建都一二〇〇年記念 伝統と創世フォーラム集成 河合隼雄・森谷勉久監修、松岡正剛構成

企画・討論参加・平安建都一二〇〇年記念 伝統と創世フォーラム集成 河合隼雄・森谷勉久監修、松岡正剛構成

企画・討論参加・平安建都一二〇〇年記念 伝統と創世フォーラム集成 河合隼雄・森谷勉久監修、松岡正剛構成

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

監修・校訂・Things Japanese: *Rakugo*, Art of Comic Storytelling Refined in the Course of Long Tradition, *Sumitomo Quarterly*, autumn 1995, No. 62. 九月

ozess, eds. S. Formaned und S. Linhart, *Buch und Bild als gesellschaftliches Kommunikationsmittel in Japan einst und jetzt*, Wien: Litas. 十一月

●貝原益軒「天地和楽の文明学」(編著 人文研共同研究報告書) 平凡社 十二月

吉川 忠 夫

史書の伝統——『史記』から『帝王世紀』まで——

しにか 六巻四号 四月

●古代中国人の不死幻想

宮崎市定先生を悼む

生命体としての大地

解説・三浦国雄著『風水／中国人のトボス』(平凡社ライブラリー)

解説・『史記』の十表と八書

書・表」(ちくま学芸文庫)

梁の徐勉の「誠子書」

劉軻伝——中唐時代史への一つの試み——『中国中世研究 続編』

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

「中外日報」社説 一九回

人

文

第四二号

一九九六年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

圖書印刷
同朋舎

非売品